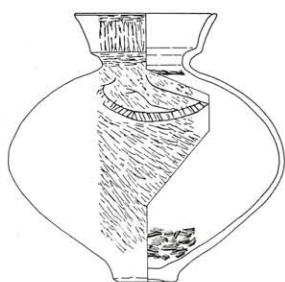


小杉町伊勢領遺跡発掘調査概要



1992年3月

富山県小杉町教育委員会

例 言

1. 本書は、富山県射水郡小杉町三ヶ2,252・2,253番地及び2,278番地に所在する伊勢領遺跡の発掘調査概要である。
2. 調査は、アパート建設に伴う造成に先立ち、伊勢不動産及び竹内武志氏の依頼を受けて小杉町教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 調査期間・発掘面積・担当者は、次のとおりである。

試掘調査：平成 2年 9月29日 (北地区) 延べ1日、発掘面積 約 180㎡ 上野 章
 : 平成 2年10月27日 (南地区) 延べ1日、発掘面積 約 118㎡ //

本調査：平成 3年 3月21日～平成 3年 5月 1日 (北地区) 延べ18日、発掘面積 約 400㎡ 上野章・原田義範
 : 平成 3年 4月23日～平成 3年 6月 1日 (南地区) 延べ23日、発掘面積 約 400㎡ 上野章・原田義範

4. 調査事務局は小杉町教育委員会におき、平成 2年から平成 3年 6月までは、事務を主任金山秀彰が担当し、社会教育課長荒川秀次が総括し、平成 3年 7月からは生涯学習課長盛田寿子が総括した。
5. 調査の実施にあたり、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから指導・協力いただいた。また調査から概要書の作成にあたり、次の方々から教示を得た。記して謝意を表したい。

池野正男・伊藤隆三・越前慶祐・林寺殿州・宮田進一・山本慎子・山森伸正

6. 遺物整理及び本書の作成は、上野・原田が行い、遺物の注記は I S R と略号を記した。

7. 遺構番号の頭の分類記号は次のとおりである。

SD：溝 SK：穴 P：柱穴・柱穴状ピット

目 次	頁	目 次	頁
I 地形と周辺の遺跡 -----	1	第7図 SD10遺構図 -----	8
II 調査の経緯 -----	2	第8図 SD11・12遺構図 -----	9
1 調査に至るまで -----	2	第9図 北地区SD01～03出土遺跡 -----	11
2 昭和59年～平成2年度までの調査 -----	2	第10図 北地区SD05外出土遺跡 -----	12
3 平成3年度の調査 -----	2	第11図 南地区出土土器の分類 -----	13
III 調査の概要 -----	5	第12図 南地区SD10出土遺物 -----	14
1 立地と層序 -----	5	第13図 南地区SD10出土遺物 -----	15
2 北地区の遺構 -----	5	第14図 南地区SD10出土遺物 -----	16
3 南地区の遺構 -----	5	第15図 南地区SD10出土遺物 -----	17
IV 出土遺物 -----	10	第16図 南地区SD10出土遺物 -----	18
1 北地区 -----	10	第17図 南地区SD10出土遺物 -----	19
2 南地区 -----	10	第18図 南地区SD10出土遺物 -----	20
V ま と め -----	33	第19図 南地区SD10出土遺物 -----	21
1 縄文時代 -----	33	第20図 南地区SD10出土遺物 -----	22
2 弥生時代後期から古墳時代初期 -----	34	第21図 南地区SD10出土遺物 -----	23
3 奈良・平安時代 -----	35	第22図 南地区SD10出土遺物 -----	24
4 下条川流域の弥生時代から古墳時代初期の 遺跡分布 -----	35	第23図 南地区SD10出土遺物 -----	25
		第24図 南地区SD10出土遺物 -----	26
		第25図 南地区SD10出土遺物 -----	27
		第26図 南地区SD10出土遺物 -----	28
		第27図 南地区SD10出土遺物 -----	29
		第28図 南地区SD10出土遺物 -----	30
		第29図 南地区SD10～12出土遺物 -----	31
		第30図 日の宮・二の井・伊勢領・針原東遺跡 出土遺物 -----	32
		第31図 下条川流域の弥生～古墳時代初期 の遺跡分布 -----	33
		図版	

(表紙；SD10出土壺，ヘラガキ文様を付けた被籠土器)

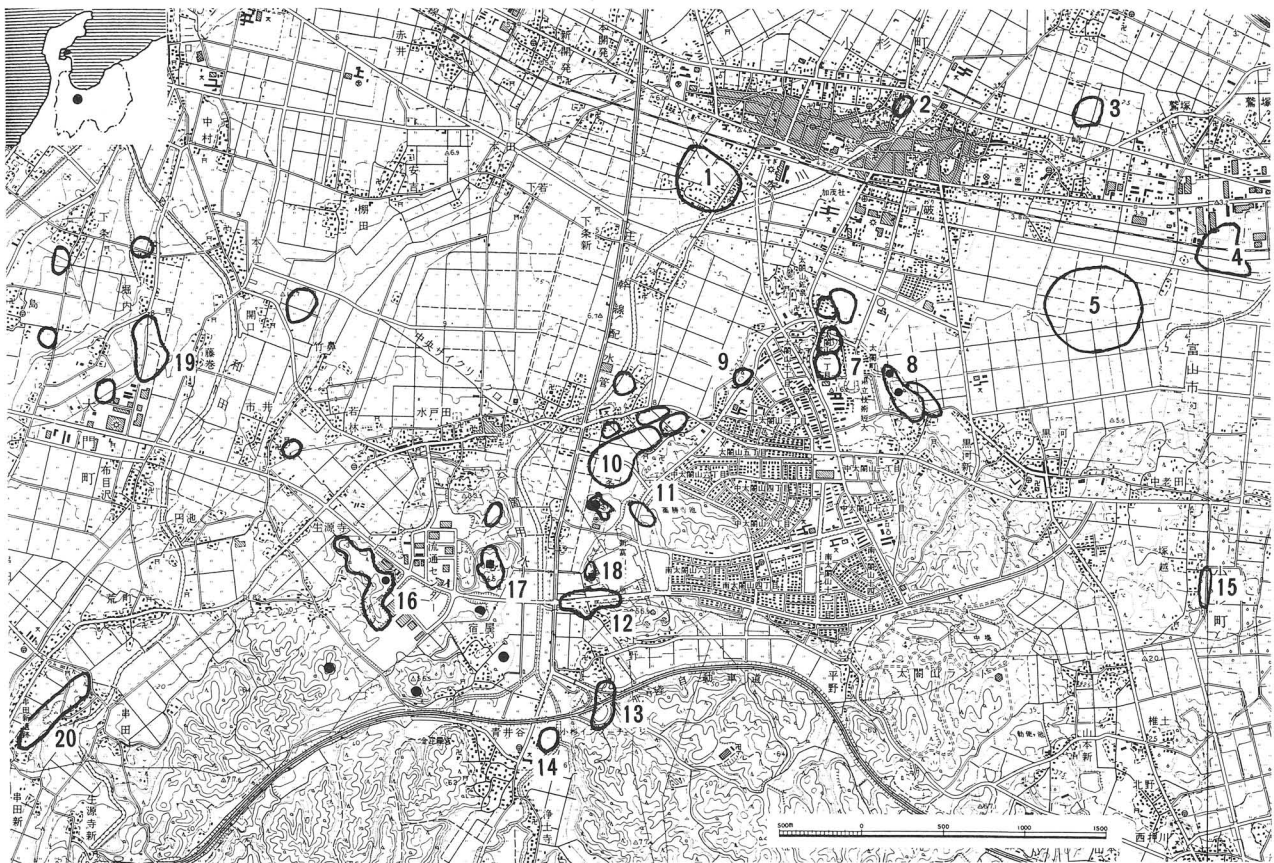
I 地形と周辺の遺跡

伊勢領遺跡は、射水郡小杉町伊勢領（三ヶ）に存在し、標高約5mの下条川左岸の水田に立地する。小杉町は県西部に位置し、北側に射水平野があり、南側に射水丘陵が広がっている。射水平野の地層は新しく、今から1万年前から八千年前に形成された新生代第四紀沖積層からなる。この地層は下条川や和田川が上流の丘陵を削って運搬してきた砂や粘土が厚く堆積してできあがったものである。今から約六千年前の海浸の最頂期には現在の地形の5mの等高線位まで海の汀線が入り込んでいたと云われている〔北林1969〕。

下条川改修以前の地形図をみると、伊勢領遺跡の南側で川は、大きく蛇行し一部は伊勢領の西側に分流して、下条川左岸に標高5mの等高線が川に沿って2kmあまりみられ、下流にいくぶん高い微高地が存在し、氾濫の影響を受けにくい所であった。川の改修は大正14年11月から下条川沿岸排水事業が実施され、蛇行した河道を改修して直線的な河川とした。またとり残された市街地も近年ようやく改修され、合わせて実施された土地改良事業により、これまで大きな降雨の度に氾濫を繰り返し被害にみまわれた地域もようやく解消されている。

小杉町史によれば平安時代から室町時代末期にかけて下条川以東の戸破・黒河・西高木などに倉垣庄があり、この庄の北方に長く伸びる大袋庄があって南端は小杉三ヶとされ、下条川が倉垣庄と大袋庄の境界をなすようである。

下条川流域では、縄文時代から弥生時代・奈良～平安時代・中近世にかけての遺跡がこれまで確認されている。伊勢領遺跡から縄文時代中期の石棒・磨製石斧・石錘の紹介があり、白石遺跡からは縄文時代中期から後期にかけての土器の出土があった。また弥生時代は後期になって遺跡が多く形成されていて、下条川流域での稲作農耕を基盤とした低地の開発が主に後期後半に集中してみられる。



第1図 地形と周辺の遺跡(弥生～古墳時代初期の遺跡)

- 1 伊勢領遺跡
- 2 高寺遺跡
- 3 戸破若宮遺跡
- 4 針原東遺跡
- 5 針原西遺跡
- 6 中山中遺跡
- 7 中山南遺跡
- 8 三谷遺跡
- 9 開山遺跡
- 10 日の宮・二の井遺跡
- 11 薬勝寺池西南遺跡
- 12 南太閤山I遺跡
- 13 上野遺跡
- 14 千田遺跡
- 15 塚越A遺跡
- 16 小杉丸山遺跡
- 17 五歩一古墳
- 18 変電所西古墳
- 19 布目沢北遺跡
- 20 串田新遺跡

II 調査の経緯

1 調査に至るまで

伊勢領遺跡の発見は古く、昭和3年12月の富山タイムス掲載の記事に地元の川腰与左衛門が畑地の耕作中に斧形の石器を発掘したことが報じられている。昭和34年発行の小杉町史には、伊勢領遺跡から出土した縄文時代中期の磨製石斧・石棒・石錘や、弥生時代の蛤刃石斧・扁平片刃石斧の実測図が載せられている。

これらの出土地は、遺物保管者の川腰信義氏によると、下条川左岸の約100m隔てた南北2箇所から発見されたと以前に説明を受けた。北側は大正から昭和にかけての下条川改修及び水田の区画整理の際に地下60～90cmの茶褐色土から見つかった。出土品には縄文時代の石器と、浅鉢の口唇部に三叉文を付けた中期の土器や弥生時代の扁平片刃石斧が各1点と高杯の棒状部3点があり保管されていた。この他に石鏃や人骨も出土したとのことであったが、遺物は現存していない。もう一方の河道の南側からは、弥生時代の太型蛤刃石斧1点が耕作中に出土している。昭和38年に川腰氏に出土地を案内して戴いた静かな遺跡周辺や駅南の水田地帯は、今は大きく様変わりしている。

2 昭和59年～平成2年度までの調査

遺跡はJR小杉駅の南1km弱の至近距離に位置し交通に便利なことから、遺跡周辺では宅地造成がさかに行なわれるようになった。昭和59・61・63年には、遺跡の一角で宅地造成が計画されたため、現地確認を行なったところ遺物が少し散布していたことから、事前に試掘調査が実施されているが、遺跡の実態はよく把握されなかった。

また平成2年4月に富山県立大学が新しく開学したことから駅周辺では、アパート建設が増えてきた。遺跡内では合い前後して二つの業者によって分譲住宅・アパートの建設が計画された。このため、小杉町教育委員会では協議を行い事前に北・南二地区の試掘調査を実施することとなった。

試掘は重機を用い幅1m程の試掘溝を掘り、遺構・遺物の検出状況から遺跡の内容を確認した。北地区は平成2年9月29日に約1,354㎡を対象面積とし、約180㎡の試掘を行ない、古墳時代から奈良～平安時代の土器と溝・土壇・柱穴状のピットなどを発見した。また、南地区は、平成2年10月27日に約1,000㎡を対象面積とし、約118㎡の試掘を実施した。調査により、弥生時代後期と奈良～平安時代の土器と溝・土壇が確認された。

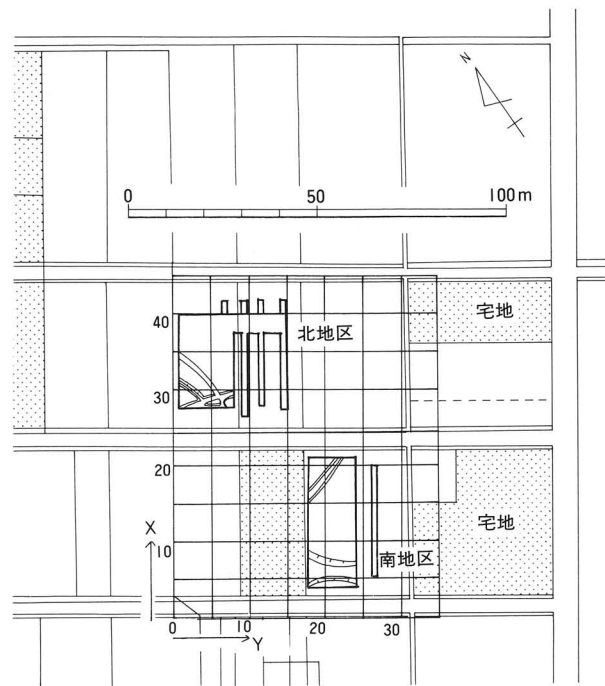
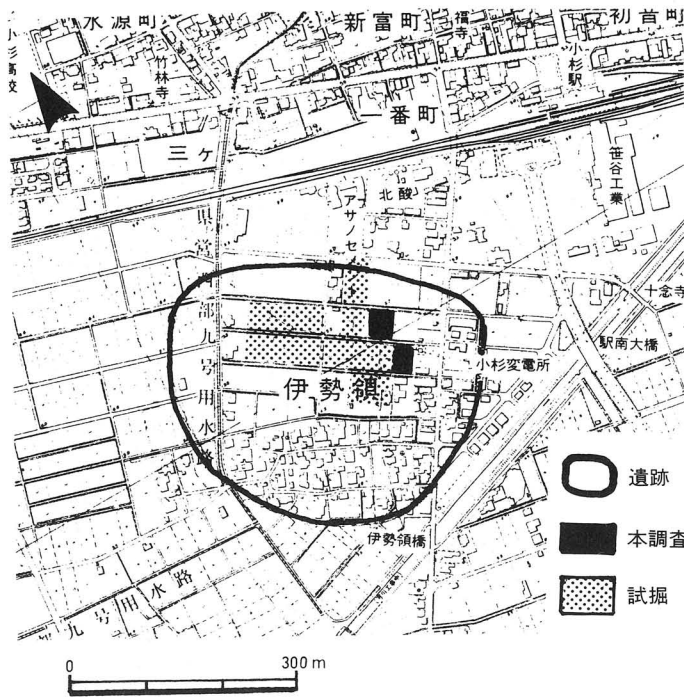
3 平成3年度の調査

試掘の結果、北・南地区には遺構・遺物がかなり存在することから、建物が建設される部分を中心に本調査が必要となった。南地区は契約上の工事完了時期がかなり迫っていたことから幾度ともなく協議が重ねられようやく、平成3年3月下旬から5月末の2カ月間をめどに調査を行なうこととなった。

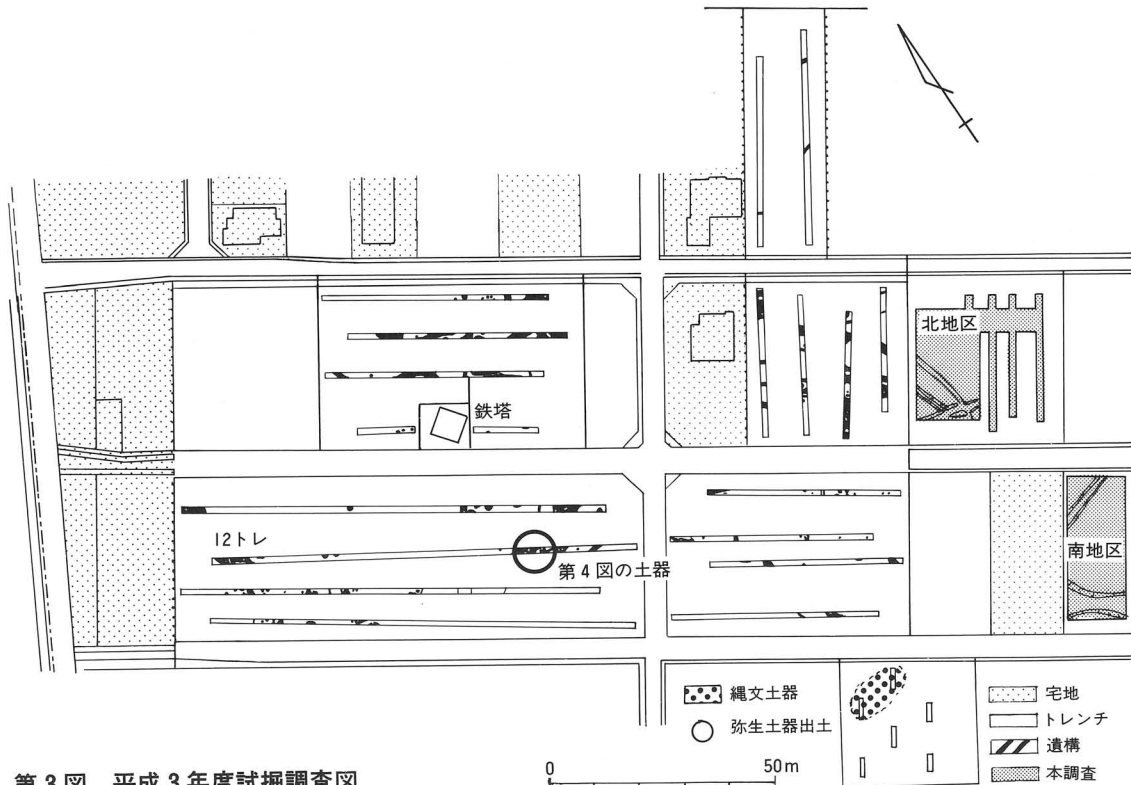
北地区の調査は、平成3年3月21日から5月1日までの延べ18日間を要し約400㎡を試掘した。また南地区は平成3年4月23日から6月1日までの延べ23日間を要し約400㎡を調査した。

本調査の期間中、不動産業者の見学が幾度もあったが、10月になって調査地の西側約12,000㎡の広さの水田に分譲住宅の建設計画が具体化し、小杉町教育委員会では、10月17日・21日に対象地を中心とした遺跡の分布調査を実施した。計画地では、弥生土器や奈良・平安時代・中世の遺物が対象地のほぼ全体から表面採取されたことを業者に報告している。その後、建設に向けて地元地権者と用地買収が進められ平成4年2月には用地の売買契約が合意された。

そのため小杉町教育委員会では、試掘調査を平成4年3月16～24日までの間に延べ4日にわたって計画地の約12,000㎡を対象に重機を用い約1,000㎡の発掘をした。試掘の結果、弥生時代後期から古墳時代初期、奈良～平安時代、中世の遺構・遺物が広い範囲から検出された。更に南地区の南西方向50～70mの盛土した元低地からは、縄文時代中期前葉の土器がまとまって出土している。遺構の分布密度から計画地は伊勢領遺跡の中心に当たっていると思われた。



第2図 遺跡の位置(左)と本調査区割り図(右)



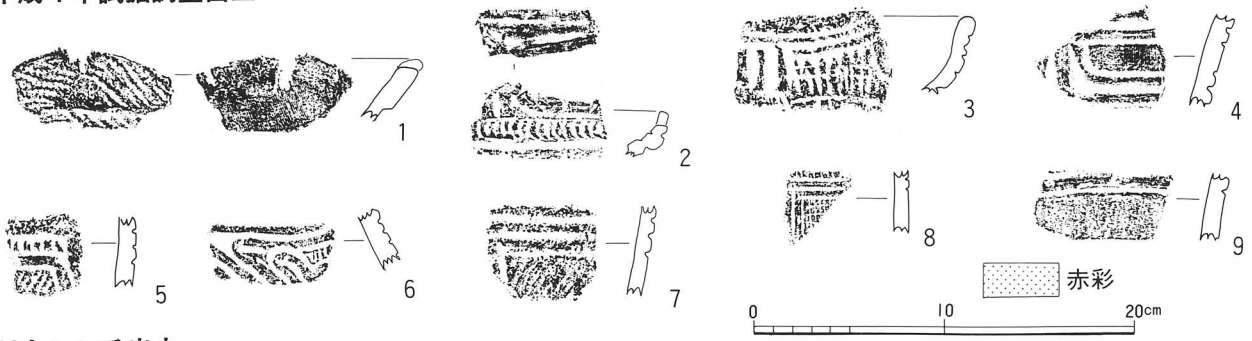
第3図 平成3年度試掘調査図

なお、遺跡の取扱いは今後、業者と調査対応を含め協議を継続し、保護措置を講ずる必要に迫られている。

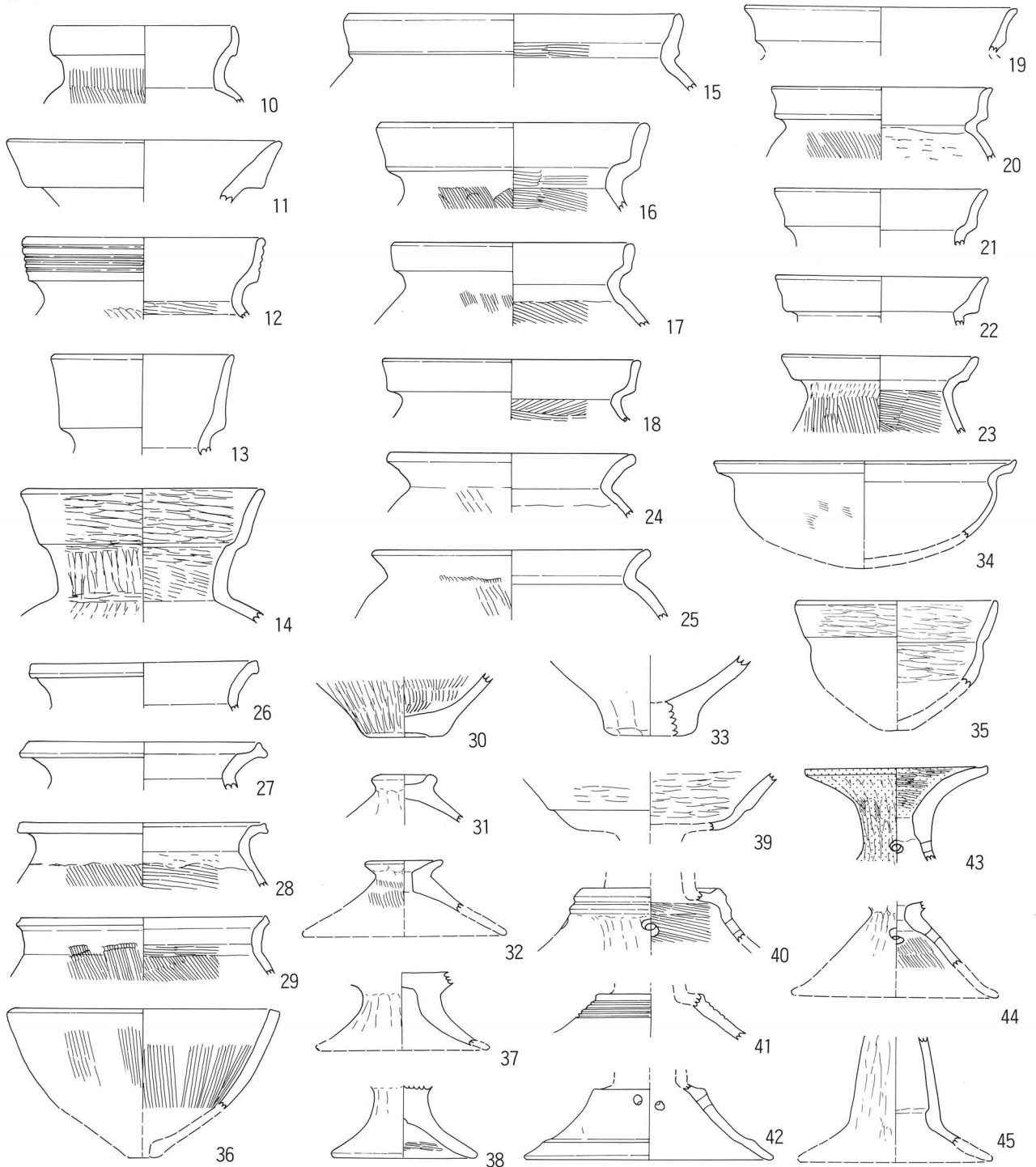
平成4年3月に試掘調査で出土した遺物は、第4図の遺物である。1～9は、対象地の南端近くから出土した縄文時代中期の土器である。1は縄文を地文とする肥厚した山形の口縁部をもつ土器で、2・3は内湾した口縁部、4～9は深鉢の体部であり、半截竹管による爪形文や平行線文など施された前葉から中葉にかけての土器である。

また、10～45は弥生時代末から古墳時代初めにかけての土器で、21トレンチの幅10m程の溝状の落込み内から出土したものである。10～14は壺、15～23は有段口縁の甕、24～29は「く」の字状口縁の甕である。34・35は有段口縁の鉢、36は有孔の鉢、37・38は壺や鉢の台付きの脚部、31・32は蓋、39は高杯杯部、40～42・45は高杯脚部、43・44は器台にあたる。この他試掘では、奈良・平安時代の須恵器・土師器・鉄滓、中世の珠洲などが検出されている。

平成4年試掘調査出土



12トレンチ出土



第4図 試掘調査の出土遺物(¼・平成4年試掘分)

Ⅲ 調査の概要

1 立地と層序

本遺跡は、現在の下条川左岸から北に約 100m離れた標高 5 mの平野に位置する。調査地周辺の地形は、下条川下流域にあたり北側へ向かうほど低くなっている。また、調査地の南西側で隣接し広がる水田は、蛇行していた旧下条川の河道となっており、調査地よりも約 1 m程低くなっている。調査地は、この河道の縁辺部の微高地上に立地する。

層序は、耕作土（20～30cm）の直下で遺構検出面の淡黄褐色強粘質土となる。南地区の南側の地山は、淡黄褐色砂質土となっている。

2 北地区の遺構（第 5・6 図、図版 1）

今回の調査で確認した遺構は、溝 8 条、穴 2 個、小穴 2 個である。溝は、S D08を除きすべて発掘区の南側に集中し、覆土に灰青褐色土強粘質土が入ることが共通点として見られる。いずれの溝も時期は、奈良時代である。穴は、北側で散発的に検出した。

S D01（第 6 図） X28～32 Y 1～8 区に位置する。溝の幅は、1.4m程で長さ 15.0m以上あり、東西方向に一直線に伸びる。深さは、0.7mである。S D03に切られ、S D06へ続く。

S D02（第 6 図） X29～30 Y 1～3 区に位置する。溝の幅は、0.7～1.3m程で長さ 5.0m以上あり、北方向に伸びる。深さは、0.08m程と浅く、覆土の灰青褐色土から須恵器の杯蓋片、杯身がでてい

S D03（第 6 図） X28～30 Y 1～5 区に位置する。溝の幅は、1.2～2.6m程で長さ 8.0m以上あり、南北方向に弧を描くように伸びる。深さは、1.0～1.2mである。溝の北端は、遺構検出面から 0.40m程の深さまだが、昭和 4 年頃の整地以前に旧用水路として利用されていた。

S D04（第 6 図） X32, 33～30 Y 2～4 区に位置する。溝の幅は、1.0m程で長さ 3.0mあり、東西方向に伸びて深さは、0.1m程と浅い。この溝は、整地以前に使用されていた旧用水路で、S D03と合流する西端ではこの用水の木杭群が検出され、覆土から現代の陶器片とともに摩滅した古代、中世の土器が出土している。

S D05（第 6 図） X31～35 Y 2～8 区に位置する。溝の長さは、16.0m以上あり、南北方向に伸び、南端は S D06に続く。溝の幅は北端で 1.7m程で南側で 2.2mとやや広がる。深さは、北端で 0.4m南端で 0.9mと深くなる。

S D06（第 6 図） X28～30 Y 6～8 区に位置する。溝の幅は、1.5m程、深さ 0.7m、東西方向に伸びる。東端で S D05と交わり、西端で S D01へ続く。

S D07（第 6 図） X28, 29 Y 7～8 区に位置する。溝の幅は、2.4m程、深さ 0.45 mである。北側の S D06から南方向に伸びる。

S D08（第 5 図） X39 Y15に位置する。溝の幅は、1.8m程、深さ 0.15mである。南北方向に走るが、北端の一部分を調査しただけである。出土遺物はない。

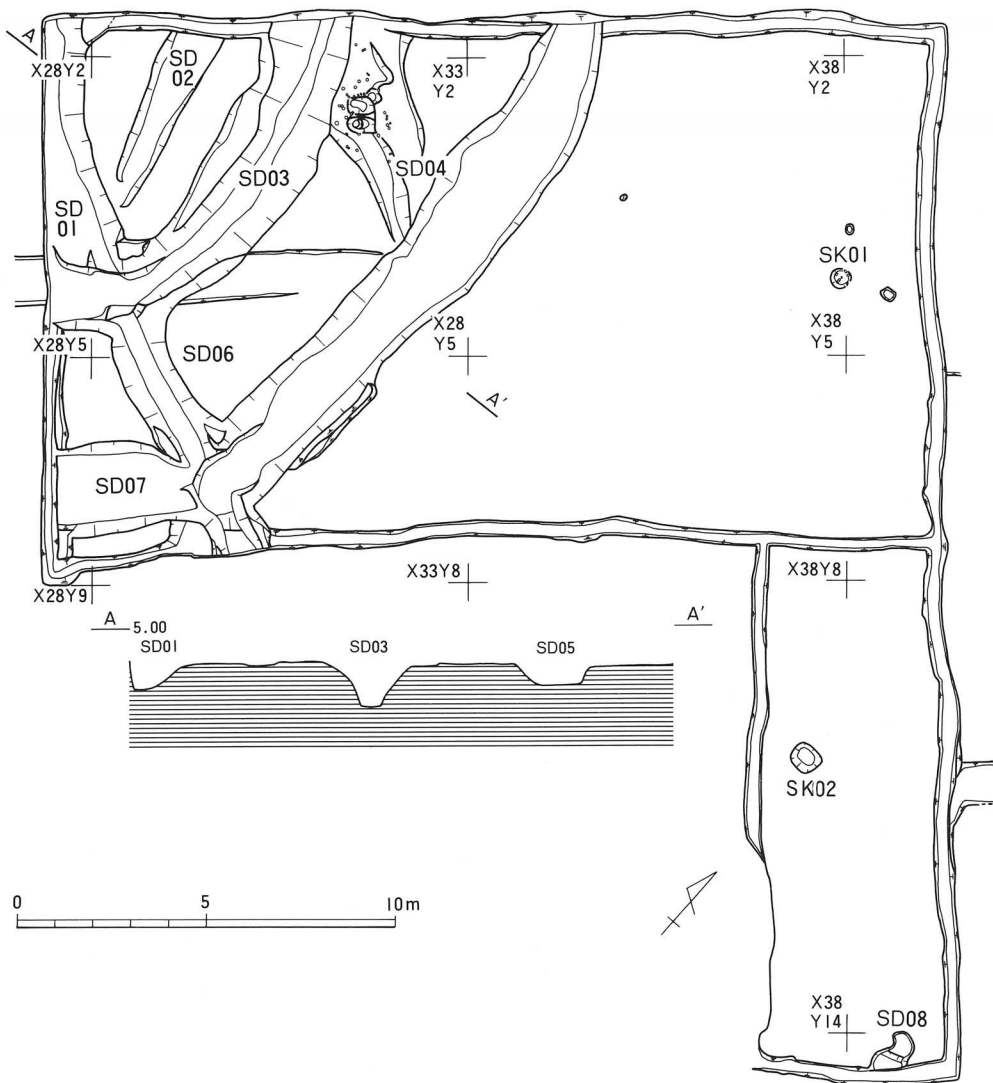
S K01（第 5 図） X38 Y 4, 5 区に位置する円形の穴。直径 0.55m、深さ 0.43mである。覆土の黒褐色粘質土から土師器と須恵器数点が出土している。

S K02（第 5 図） X38 Y11区に位置する隅円方形の穴。長軸 0.75m、短軸 0.65m、深さ 0.68mである。覆土は、上から黒褐色粘質土、灰青色土となる。出土遺物はない。

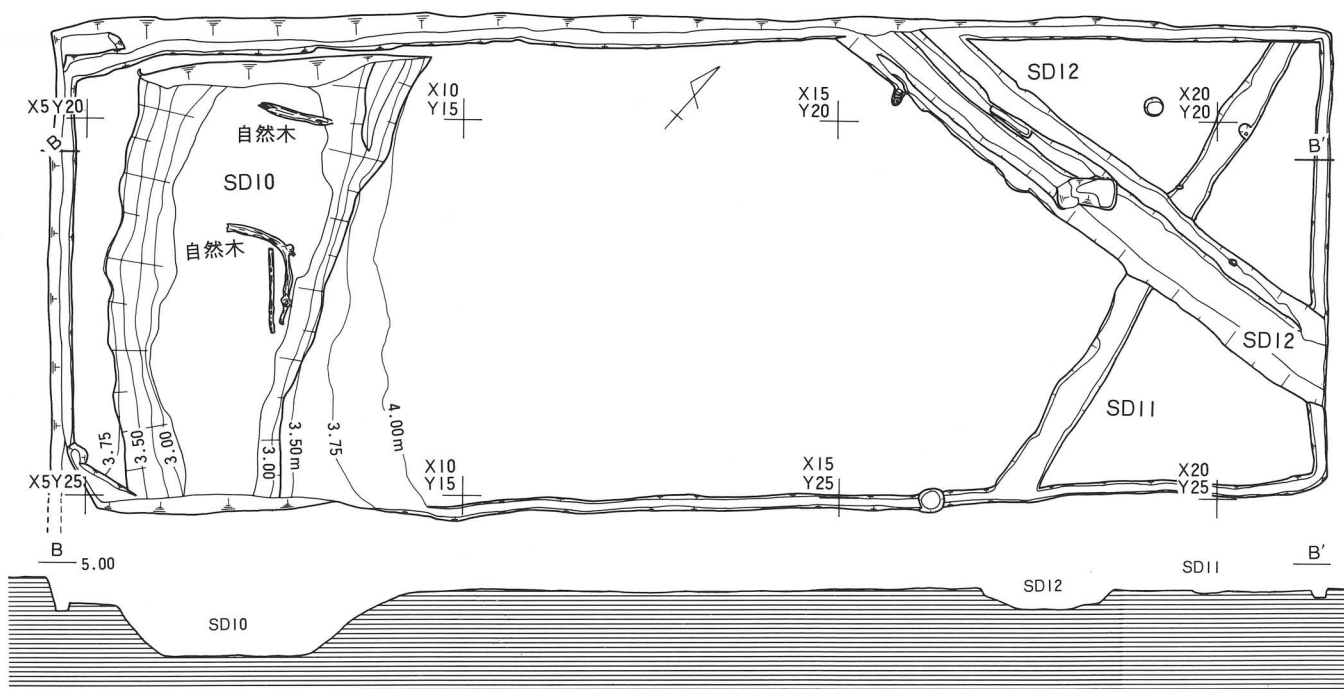
3 南地区の遺構（第 5・7・8 図、図版 1・2）

発掘区は、北側が僅かに高く南側ほど低くなっている。検出した遺構は、溝 3 条と小穴 2 個である。南側に位置する S D10の大溝が弥生時代後期で、北側に位置する溝 2 条は、S D12が平安時代、S D11が整地以前の旧用水路であ

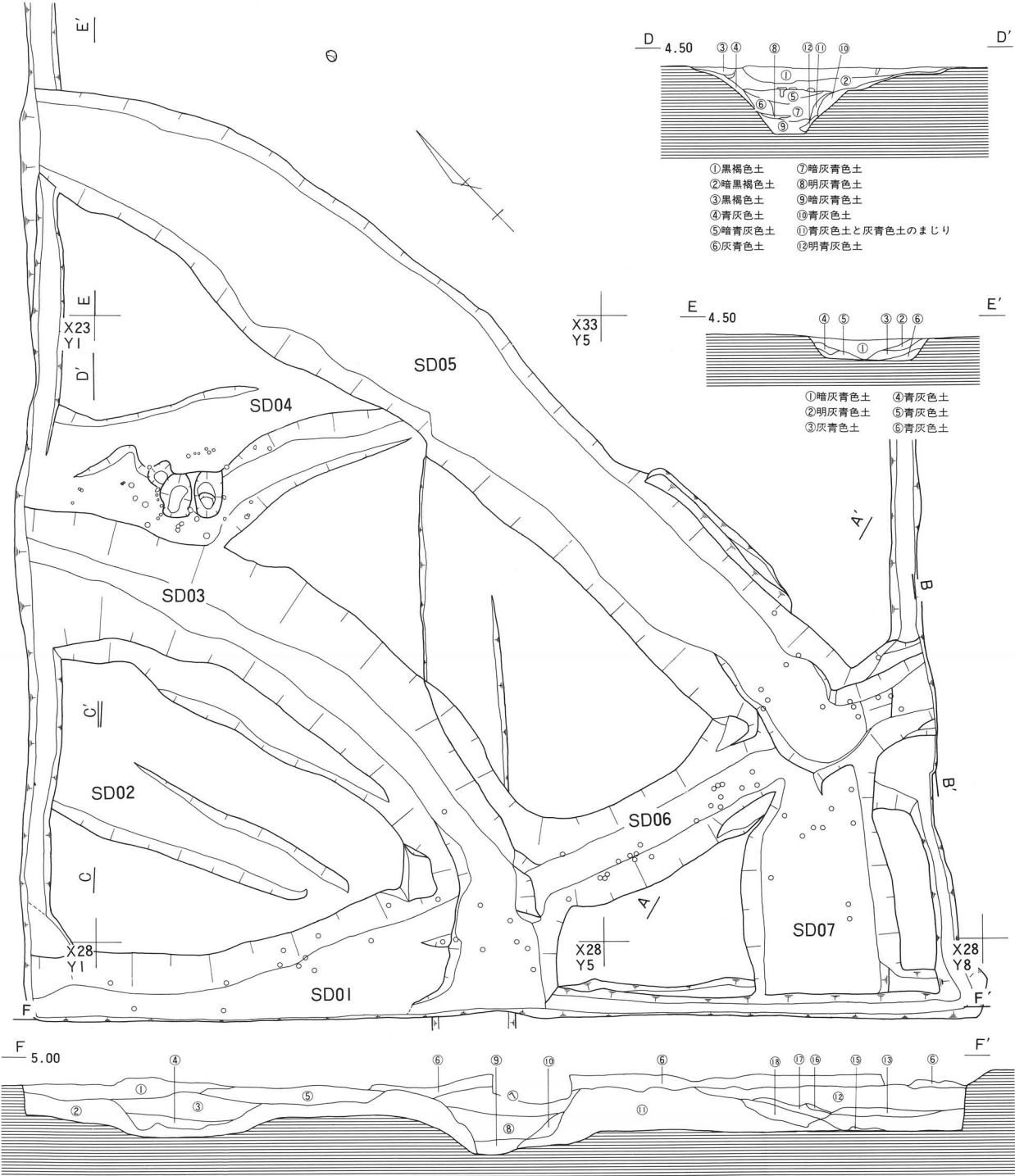
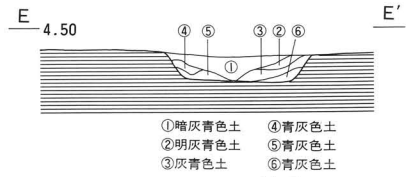
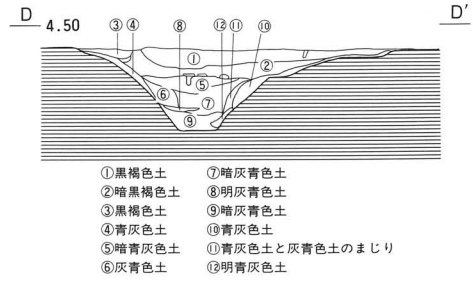
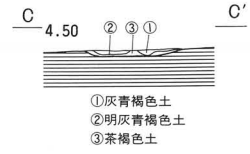
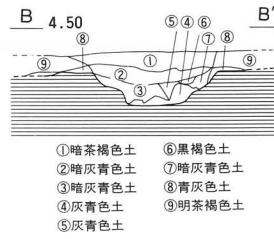
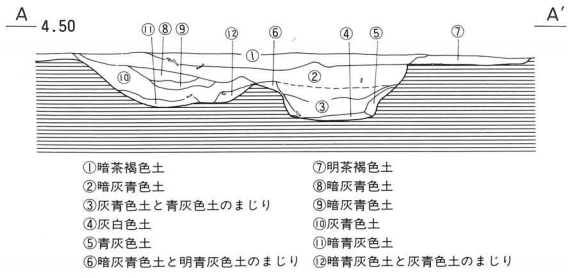
北地区調査区



南地区調査区



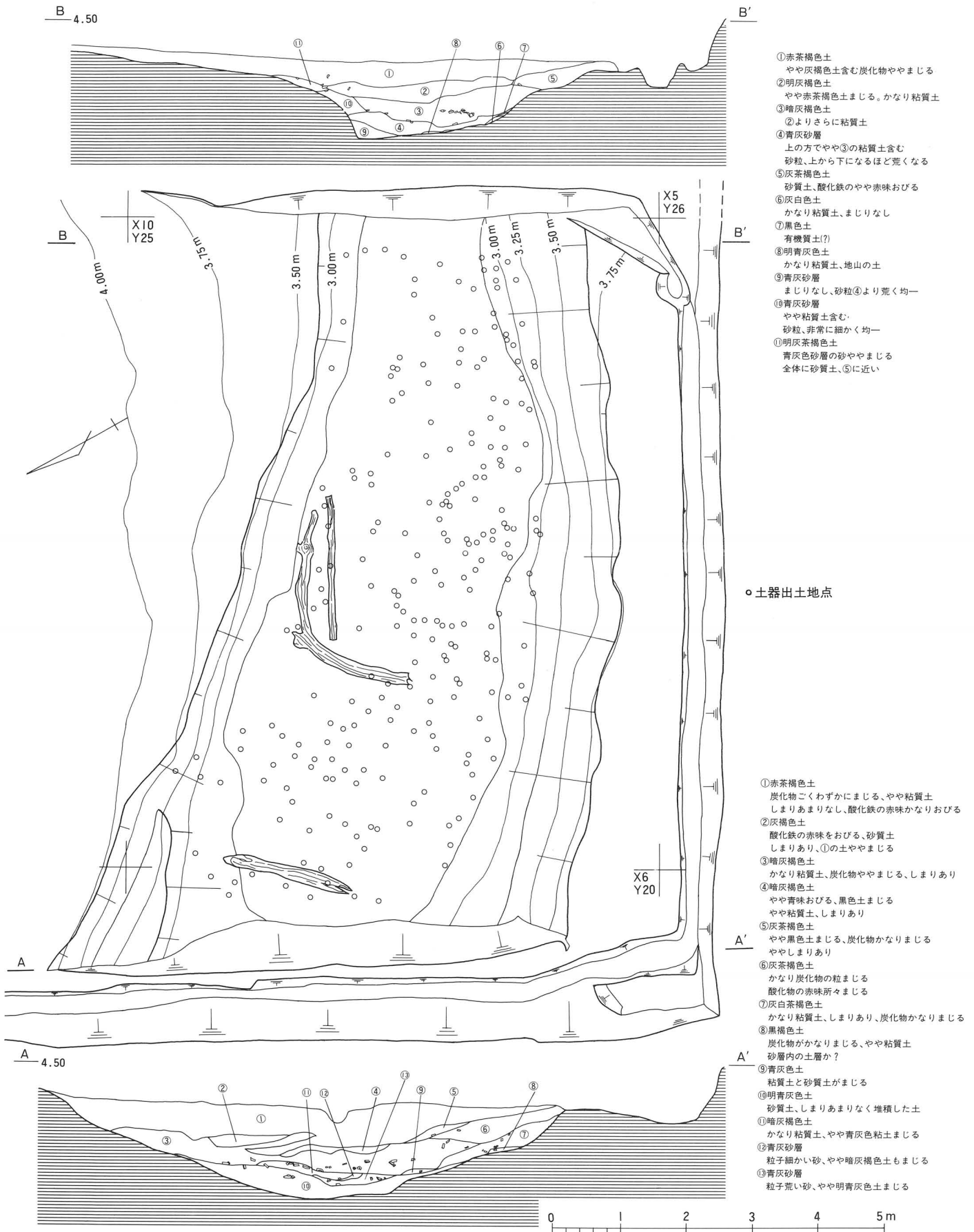
第5図 北地区(上)、南地区(下)遺構図 (1/200)



- ①暗茶褐色土 ⑤茶褐色土 ⑨暗灰青色土 ⑬暗赤茶褐色土 ⑰灰白色土と茶褐色土のまじり
 ②明青灰色土 ⑥暗茶褐色土 ⑩灰青色土 ⑭灰茶褐色土 ⑱暗灰茶褐色土
 ③灰青色土 ⑦灰青色土 ⑪茶褐色土と灰色粘土のまじり ⑮灰褐色土
 ④灰青色土 ⑧灰青色土 ⑫暗茶褐色土 ⑯赤茶褐色土



第6図 SD01~SD07遺構図(北地区)

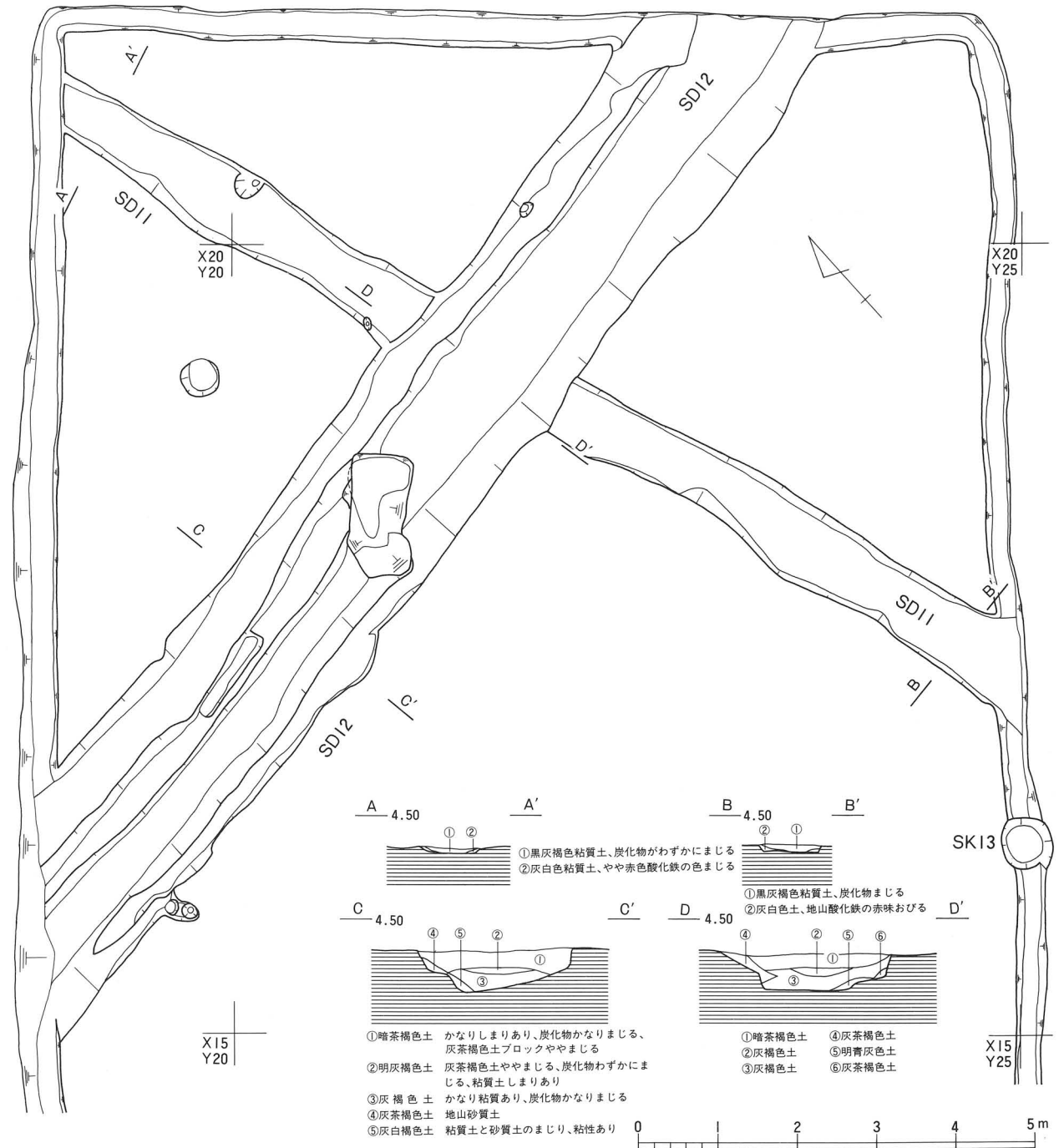


第7図 SD10遺構図(南地区)(1/80)

る。

SD10 (第7図) X 6~9 Y19~25区に位置し東西方向にはしる。溝の幅は、4.0 ~7.5mと西側に向かって広く、僅かに北方向に曲がる。深さも遺構面から、1.2~1.4m と西側が深くなっている。底面の断面形は僅かに弓状に丸くなる。北側の底面からの立ち上がりが65~75度と急勾配となり、南側は20~30度と緩やかである。覆土は、上層から①層赤茶褐色、②層灰茶褐色、③層灰褐色、④層青灰色に大別される。①~③層は順に強粘質土となり、④層は砂層または砂質土となる。①~②層からは奈良時代の土器が出土し、③~④層にかけて弥生時代後期の土器が出土している。とくに③層からは、溝全体にわたって器面の風化が著しいが器形が窺える程の大きさの土器が多量に出土している。④層からは③層よりやや少なくなるが溝全体からまとまって土器が出土している。溝の底面がやや埋まりかけた時期に多量の土器が廃棄されたと思われる。

SD11 (第8図) X16~21 Y20~26区に位置し南北方向にはしる。溝の幅は、1.0m 程、深さ0.10mと浅い。覆土は、黒灰褐色の砂質土で現代の陶器片と共に流れ込みと思われる須恵器が出土している。



第8図 SD11・12遺構図 (南地区)

SD12 (第8図) X16~22Y20~24区に位置し東西方向にはしる。溝の幅は、2.0m程、深さ0.45m程である。溝の底面はほぼ平らで、壁面が階段状にたち上がる。覆土は、上層から①層暗茶褐色、②層灰茶褐色の各粘質土に大別される。土器は、溝全体にまばらではあるが須恵器の小片が出土している。すべて①層からの出土である。

IV 出土遺物

平成2・3年に実施した北・南地区の発掘調査により出土した遺物は、縄文時代中期の土器と主に弥生時代後期末、奈良・平安時代の遺物であり、殆どが遺構に伴って出土している。

1 北地区 (第9・10図、図版3)

北地区からの出土遺物量は、整理箱に2箱程と少なく、遺構が多く存在する対象地の南寄りから検出された。

SD01 (第9図50~55) 須恵器・土師器が出土しており、50~55はいずれも須恵器である。50・51は杯蓋、52~54は高台付きの杯Bで三種の法量差があり、底部から直線状に折れて立ち上がる。55は壺の体部下半にあたる。

SD02 (第9図56~60) 56・57は杯蓋の口縁部で、端部が下方に少し尖る。56は天井部外面がヘラケズリされる。58は底部にヘラキリ痕を留める杯A、59・60は杯Bにあたる。

SD03 (第9図61~82) 61~69は昭和初年頃の整地前の用水路の底面近くから出土した遺物であり、61は弥生時代末の高杯の脚部、62は室町時代の瓷器系甕の口縁部、63は珠洲の甕体部である。64~69は近世以降の陶磁器であり65・66・67は伊万里の碗で乳灰色の釉に淡い青色で模様が描かる。64は見込みが蛇の目釉ハギの血である。68は外面に糸きり痕をもつ鉄釉をかけたもので香炉であろうか。また、69は鉄釉を施した摺鉢である。

70~82は溝の覆土から出土した遺物である。70~77・79は8世紀半ばから後半にかけての須恵器で、70・71は杯蓋、72~74は杯A、75~77は杯B、79は中形の甕、78・82は8世紀半ばの土師器の甕である。80は9世紀代の双耳瓶であり、81は瓶類の底部にあたる。

SD05 (第10図83~92) 81は弥生土器の壺底部で、84~92は須恵器である。85は稜腕とみられ口縁部を欠いている。86~90は口径11.0~16.6cm、器高4.0~4.7cmの杯Bである。91は壺の底部であり、92はヨコナデした土師器の甕である。

SD06 (第10図93) 93は口径10.8cm、器高4.1cmの杯Bであり、底部からの口縁部への立ち上がり角度が似る。

この他、調査区からは鉄滓や94・95のフイゴの羽口が出ており、外面は熱により黒くガラス状になっている。

2 南地区 (第12~29図、図版第3・4)

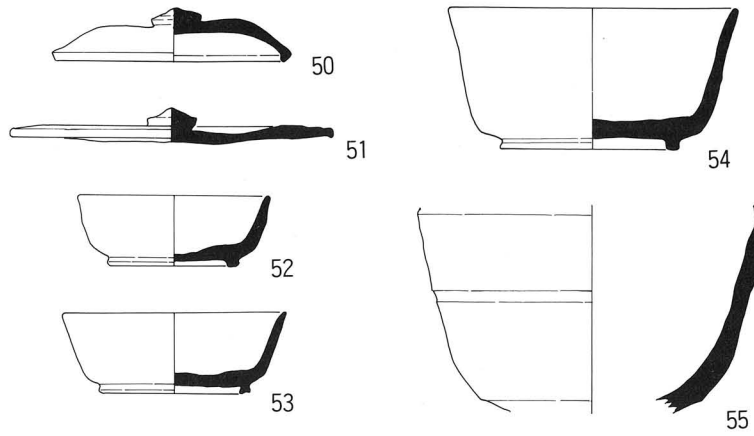
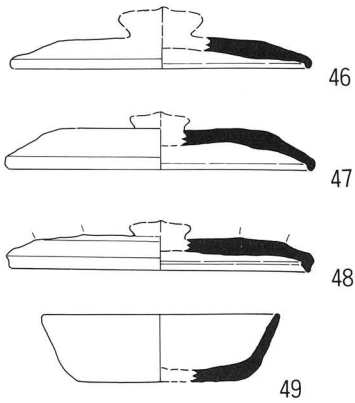
南地区の大半の遺物は弥生時代末のSD10の溝内から出土したもので、遺物量は破片の状態にして整理箱に約50箱と調査面積の割には多く出土した。この内壺・甕はかなり図化しているが、高杯・器台・鉢などは大きな破片のみの図化に留め、底部の図は掲載していない。弥生時代後期の土器は、以下第11図のように仮に器種の分類をして説明を行なう。

SD10 (第12図96~第29図606) 覆土上部からは、592~606の奈良・平安時代の土器と弥生土器が少し出土し、下部から底面にかけて96~583の弥生土器や584~591の石器が出土している。弥生土器の器種には壺・甕・蓋・高杯・器台などがみられる。

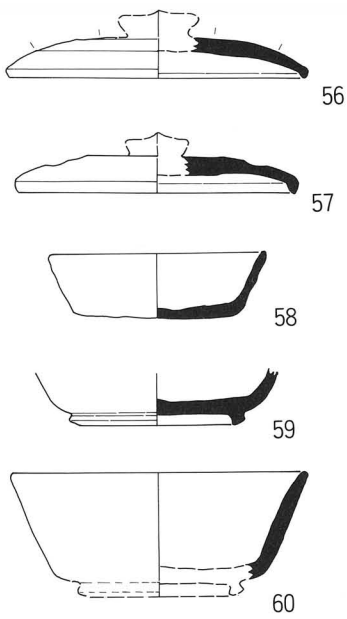
壺 (第12図96~第16図196) 「く」の字状口縁の壺A96・97・106には、体部が大きく張り出し球形になる96と、丈高の卵形となり小さな平底が付く106がある。114~118は壺A₃にあたり、口縁端面が上方または下方に張り出させる。120は肥厚させた端面に二条の擬凹線文を引き、121は端面に縦方向に二本の棒状浮文を付ける。壺Dの長頸壺は口頸部・体部により更に細分される。口頸部の長さは100・101・103のように器高に対し1/4とあまり長くないもの

北地区試掘時出土

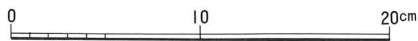
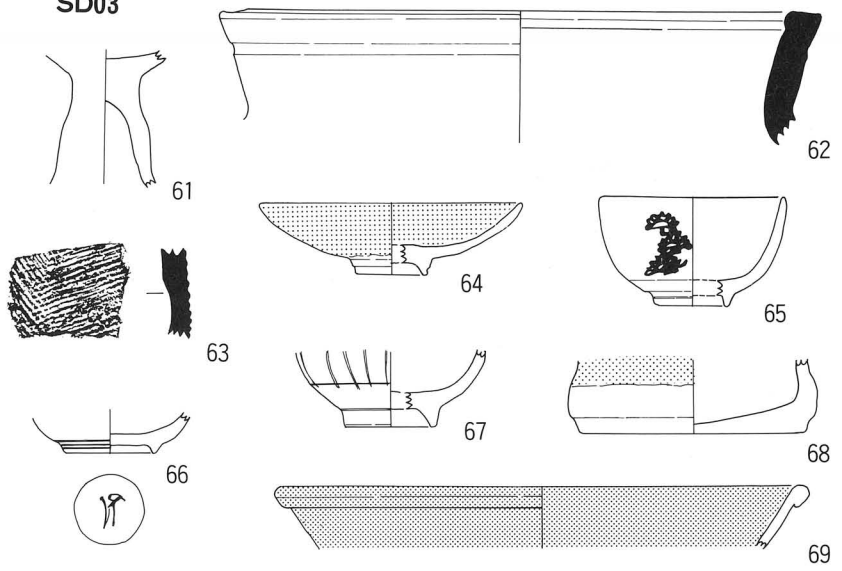
SD01



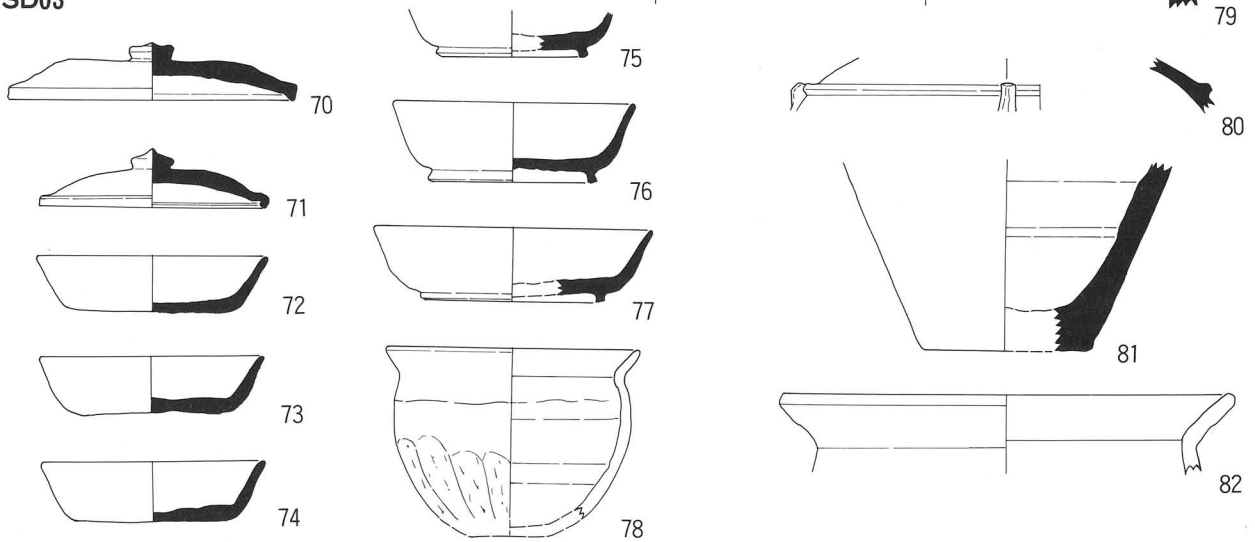
SD02



SD03

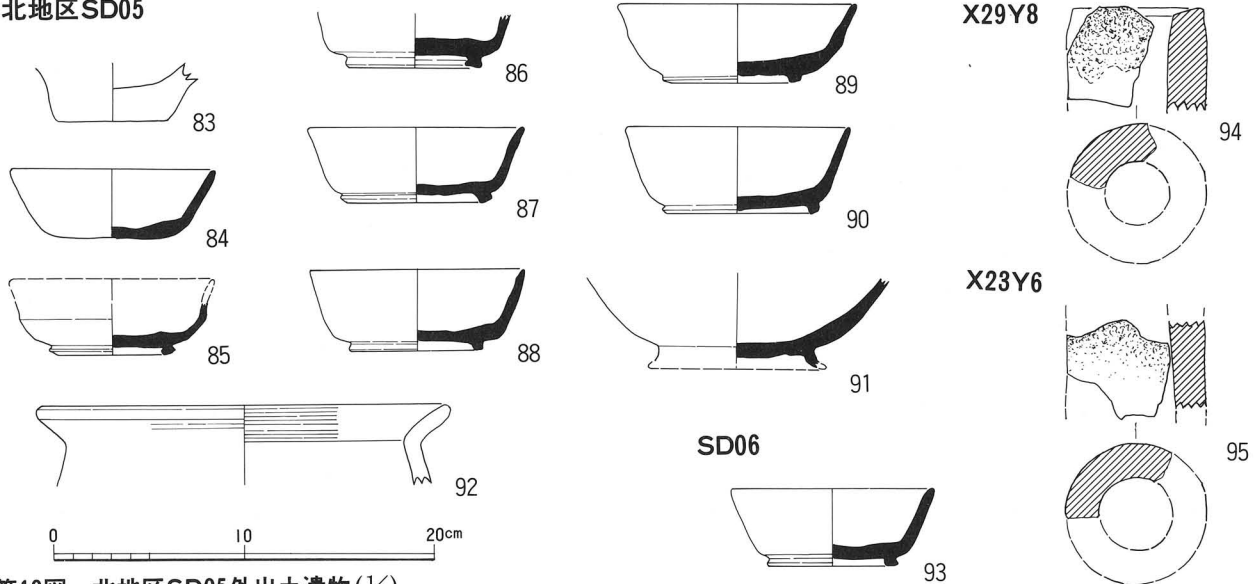


SD03



第9図 北地区SD01~03出土遺物(1/4)

北地区SD05



第10図 北地区SD05外出土遺物(¼)

と105・108のように器高に対し1/3程の長さをもつものがある。また、口頸部が104・105のようにあまり広がらずに筒状になるものと、112・113のように外反しながら大きく開くものが見られる。口径と体部最大径の比率は、口径の1.2~1.8倍まで幅があって形状が卵形・球形・扁平な無花果形と変化している。器面の調整は内外面にハケ目を行い、更にヘラケズリをくわえたものもある。内面には99・103のように形成時の輪積み痕を留めたり、器面をナデたり軽くヘラケズリしたりして調整するものもある。なお、107・108の口頸部にはヘラによる記号状の文様が1箇所施される。

壺E₁の123・126は長頸壺の口縁部をヨコナデにより浅く擬凹線状にしたものであり、126にはヘラによる記号状の文様が1箇所に付けられる。127~137は有段口縁を付けた長頸壺であり、口頸部の長い132~137と、口頸部が少し短い129の両者がみられる。

有段口縁を付けた壺Fには、127の口縁端部が少し内傾するものと、128・129の比較的短い口頸部をもつもの、132~137のように長い口頸部をもつものがある。器面の調整は外面にハケ目を行い、有段口縁にヨコナデを加えたものが多い。

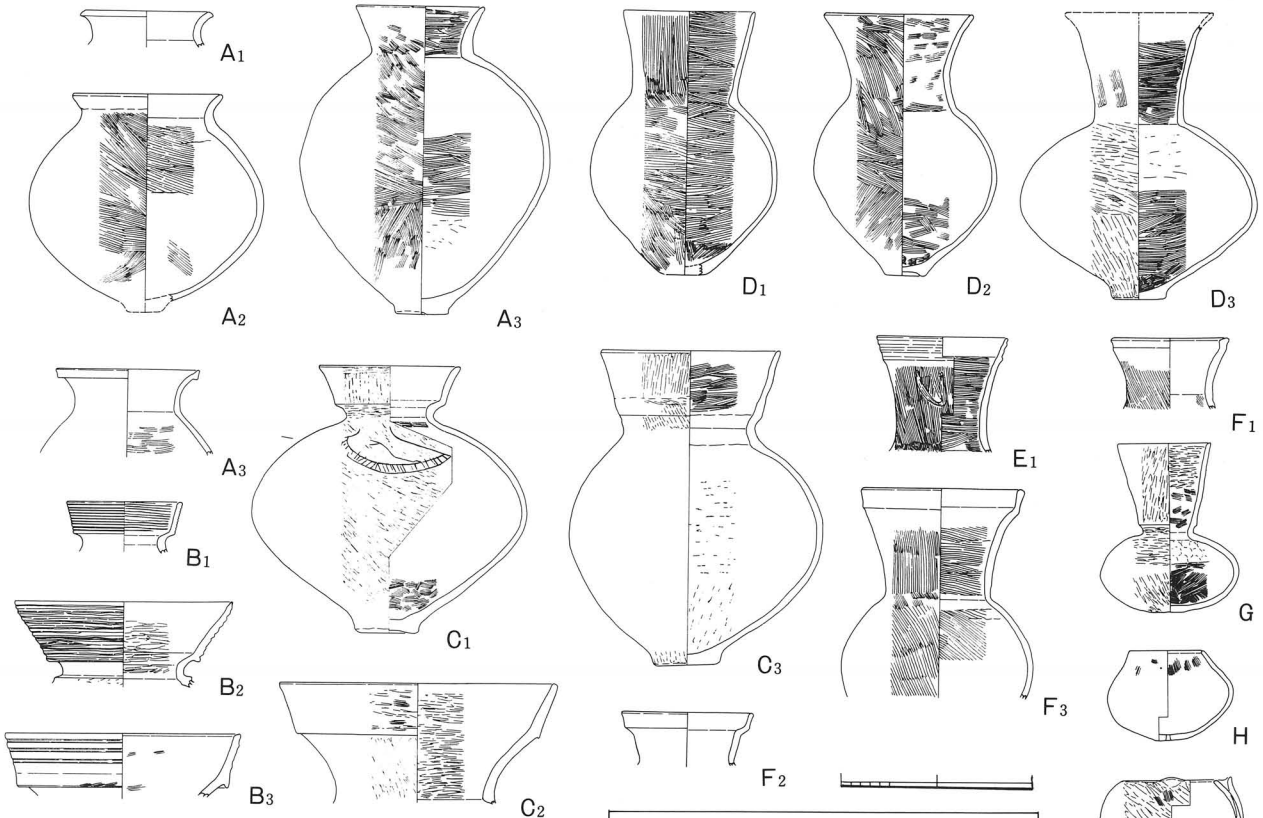
擬凹線を有段口縁に引いた壺Bには、口径が12~16cmの小さな150・151、154~157の壺B₁と口径が大きく外傾し先細りの口縁端部付けた140の壺B₂があり、頸部には低い段を巡らせる。141は3条の浅い擬凹線を有段部に引く。

無文の有段口縁をもつ壺Cには、頸部が短く有段部の屈曲が強い壺C₁と、長い頸部をもちゆるく屈曲する142の壺C₂、弱く屈曲した有段口縁に短い頸部が付く147の壺C₃などがある。また、158~160、172・173は頸部が若干長く体部が張りだすもので、183・184は頸部が短く体部が球形に大きく張るものであり、167・174のように体部が口径より少し大きくなるものもある。153の口縁部の一箇所には、ヘラによる記号が施される。

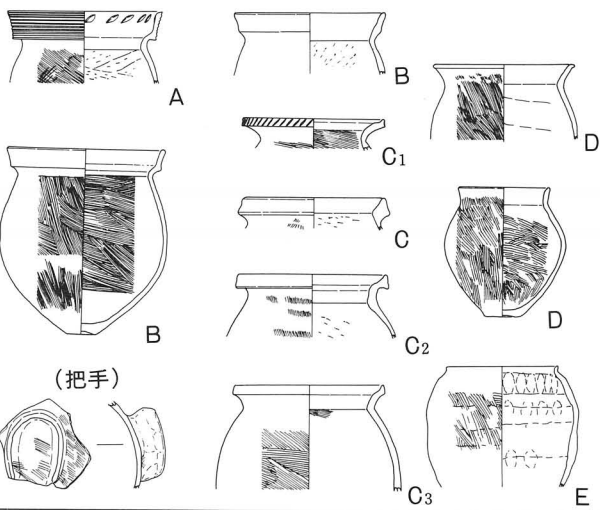
壺C₁の149は器高が28.3cmで、体部が大きく張りだしたもので全体の約1/3を欠いている。ヘラミガキした体部上半には横12cm、上下9cmの範囲に篋描き沈線による文様が描かれる。文様は、同心円状の下弦に向けた弧線の間を結ぶ短線を3~7mmの間隔に引き、左上を欠いているが大きめの弧線を描く。文様の右側から左上に伸びる線は、先端が二つに枝分かかれし、右端からはもう1本の沈線が左上方に向かい伸びた構図であるが、文様が何を表現したのかははっきりしない。この149は被籠土器で、体部の中程に十数cmの大きさの黒班があって、黒班上の器面には、幅4~7mmの淡灰褐色をした3~4cm間隔の編み物痕が残る。本来は頸部から底部にかけ全体に編み物がおおっていたのであろうが、淡灰黄色をした体部には痕跡が残っていない。

191は無頸の壺Hで、底部に直径5mmの小穴をあける。190は台付きの片口の壺Iで、口縁部に小さな片口を1箇所

壺



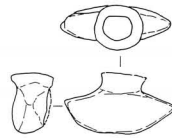
甕



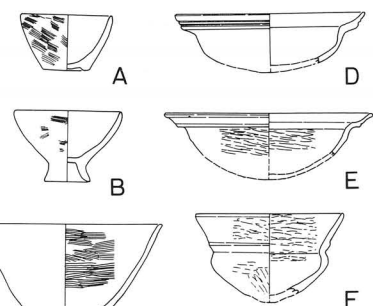
小形土器



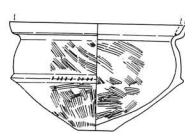
皮袋形土器



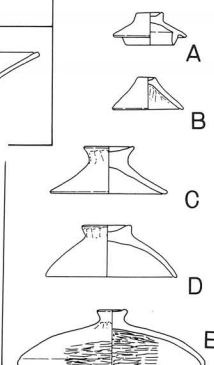
鉢



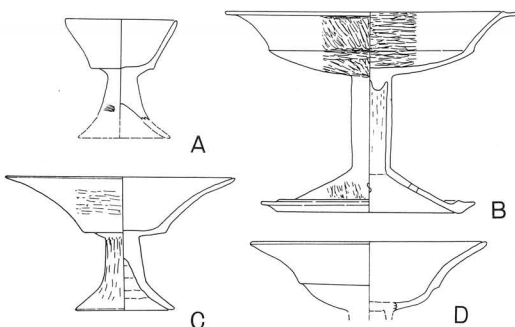
鉢(手焙土器)



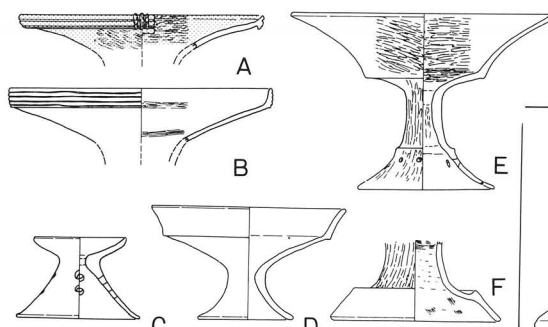
蓋



高杯

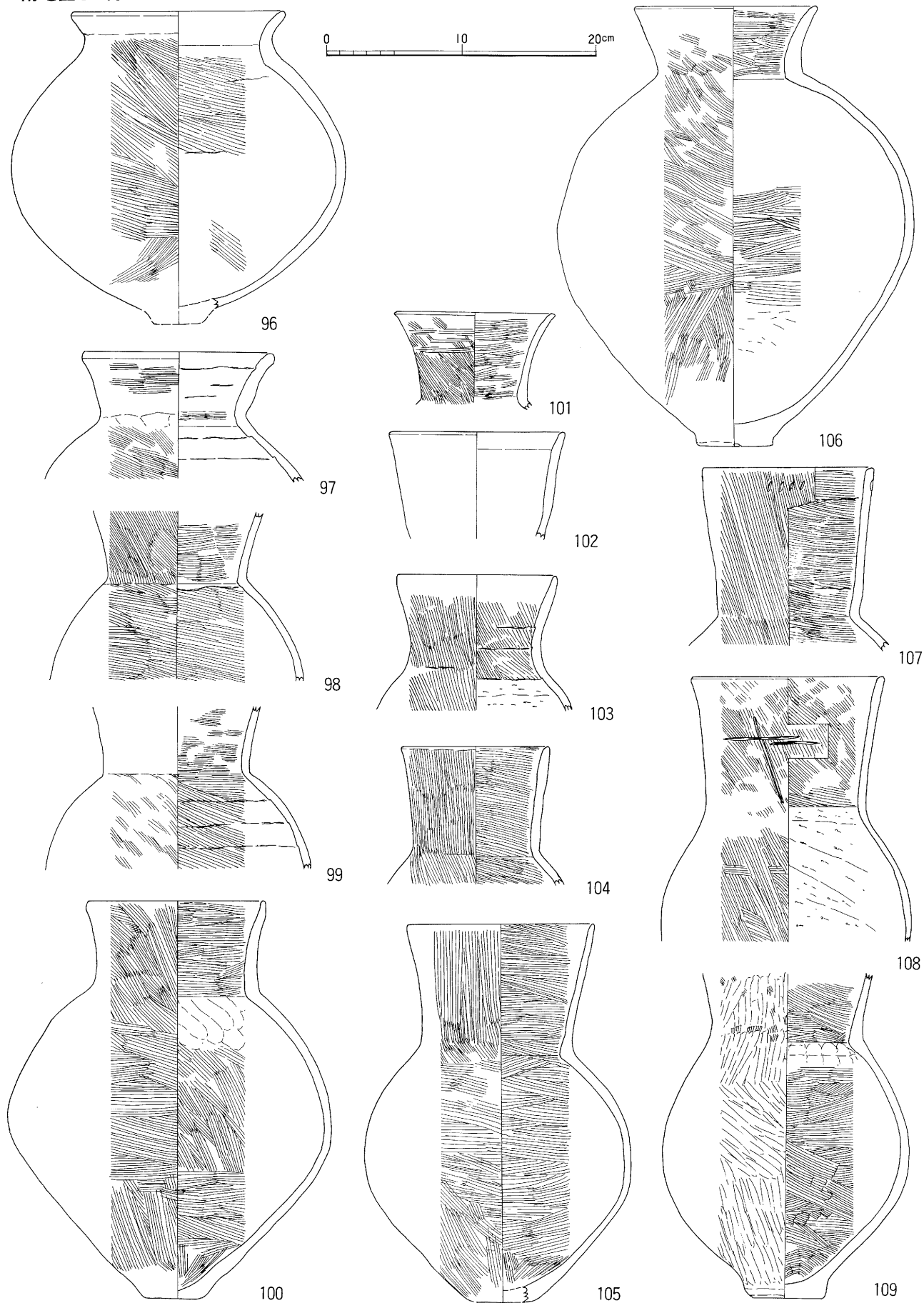


器台



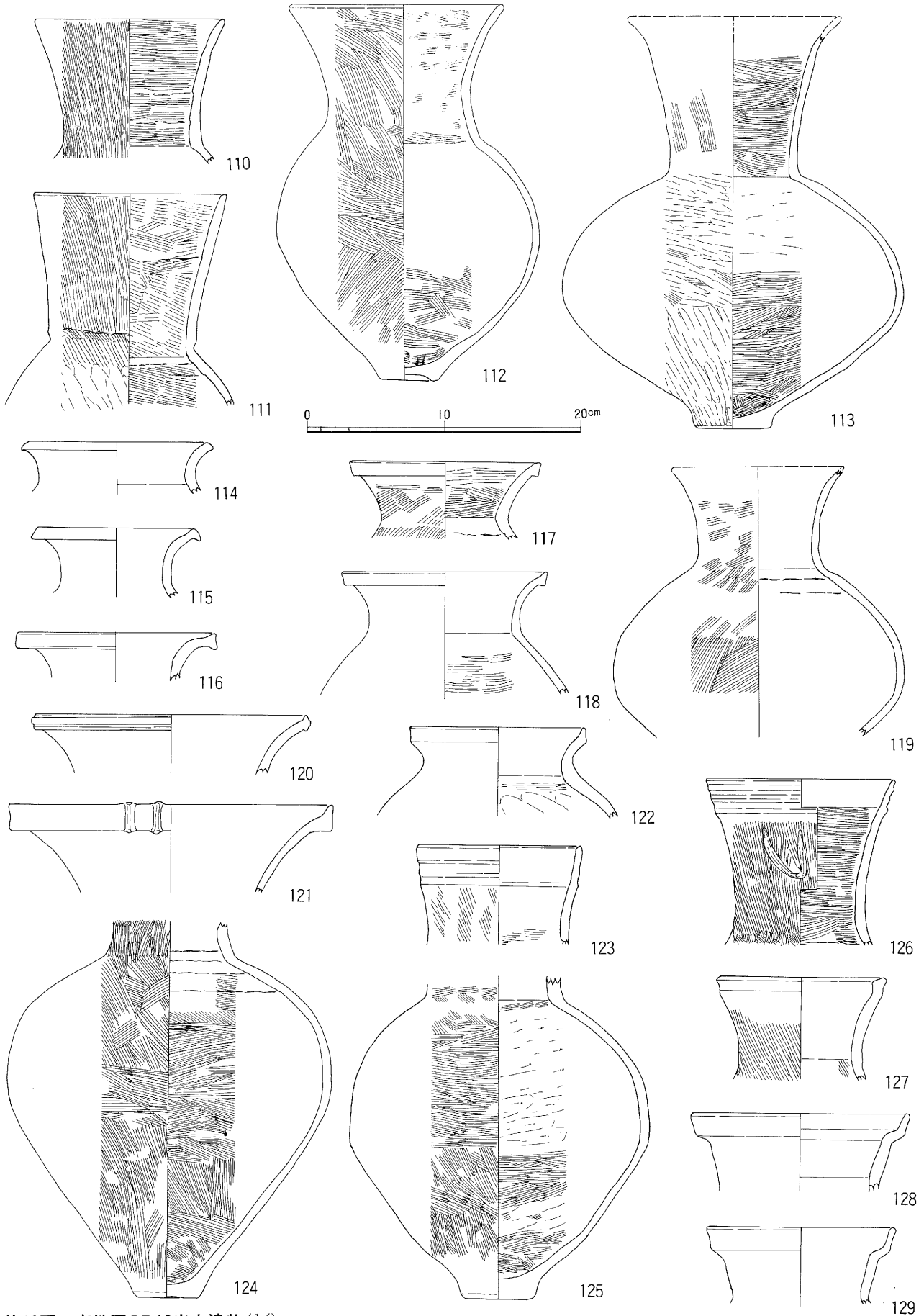
第11図 南地区出土土器の分類

南地区SD10



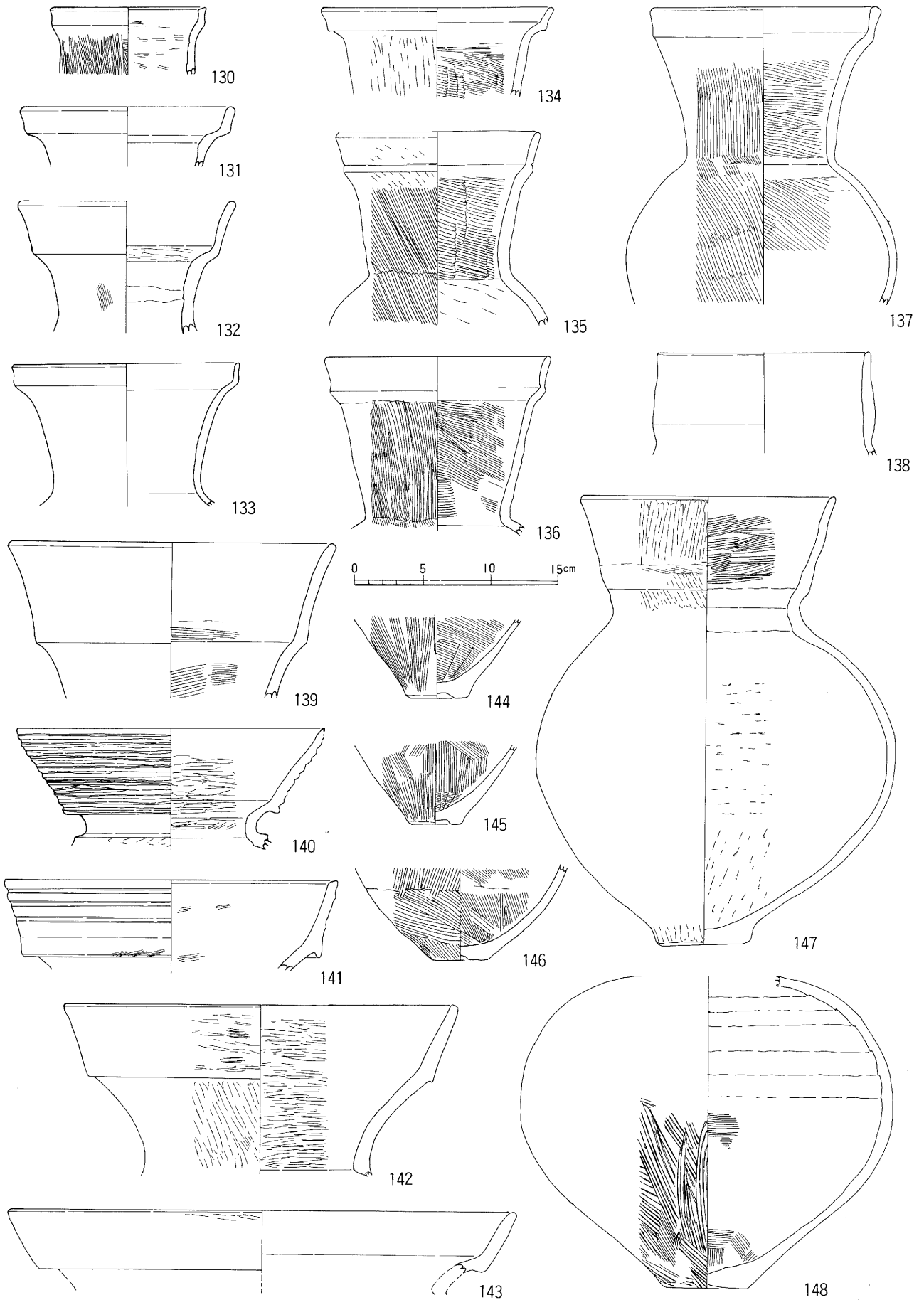
第12图 南地区SD10出土遗物(1/4)

南地区SD10



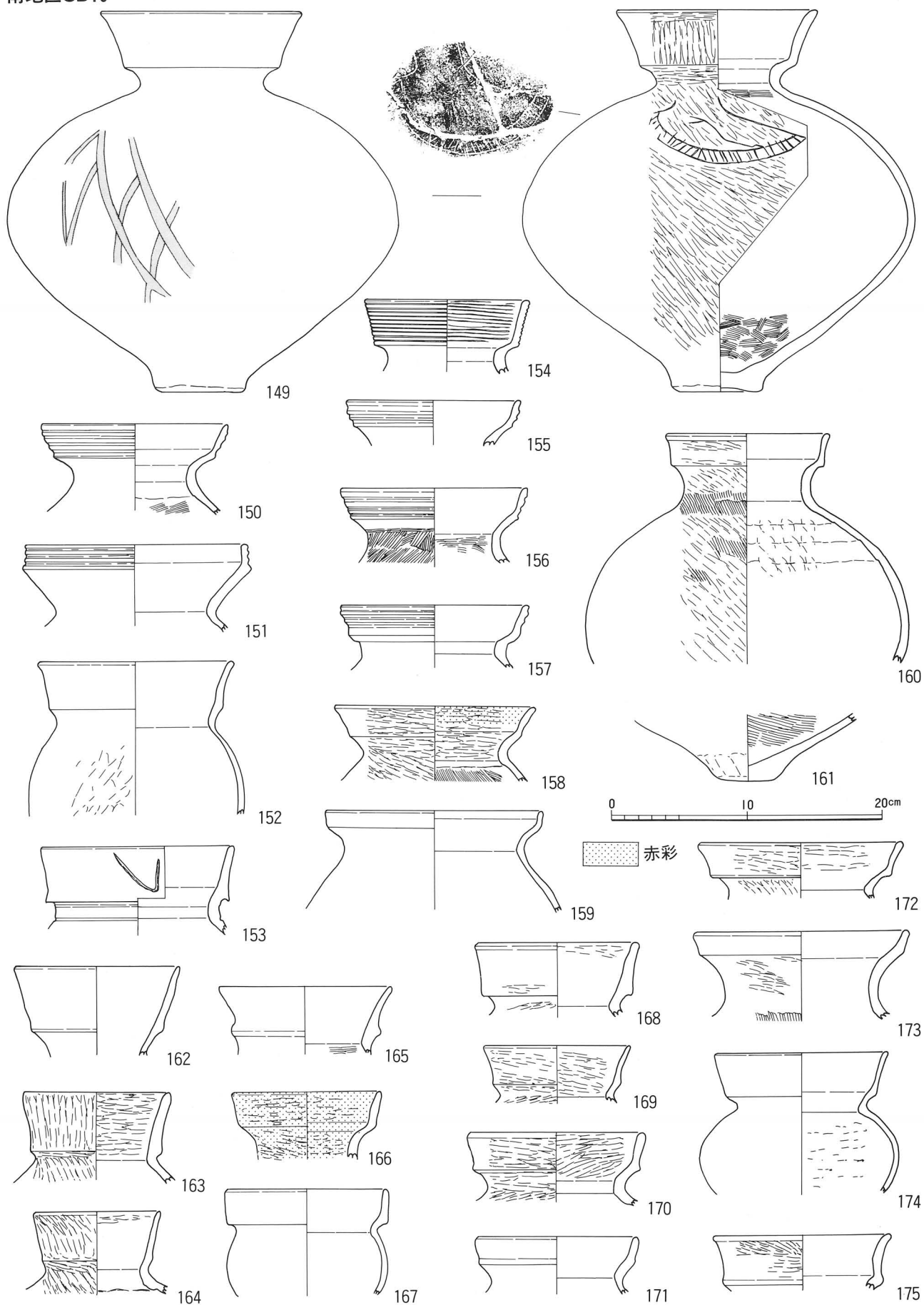
第13图 南地区SD10出土遗物(1/4)

南地区SD10



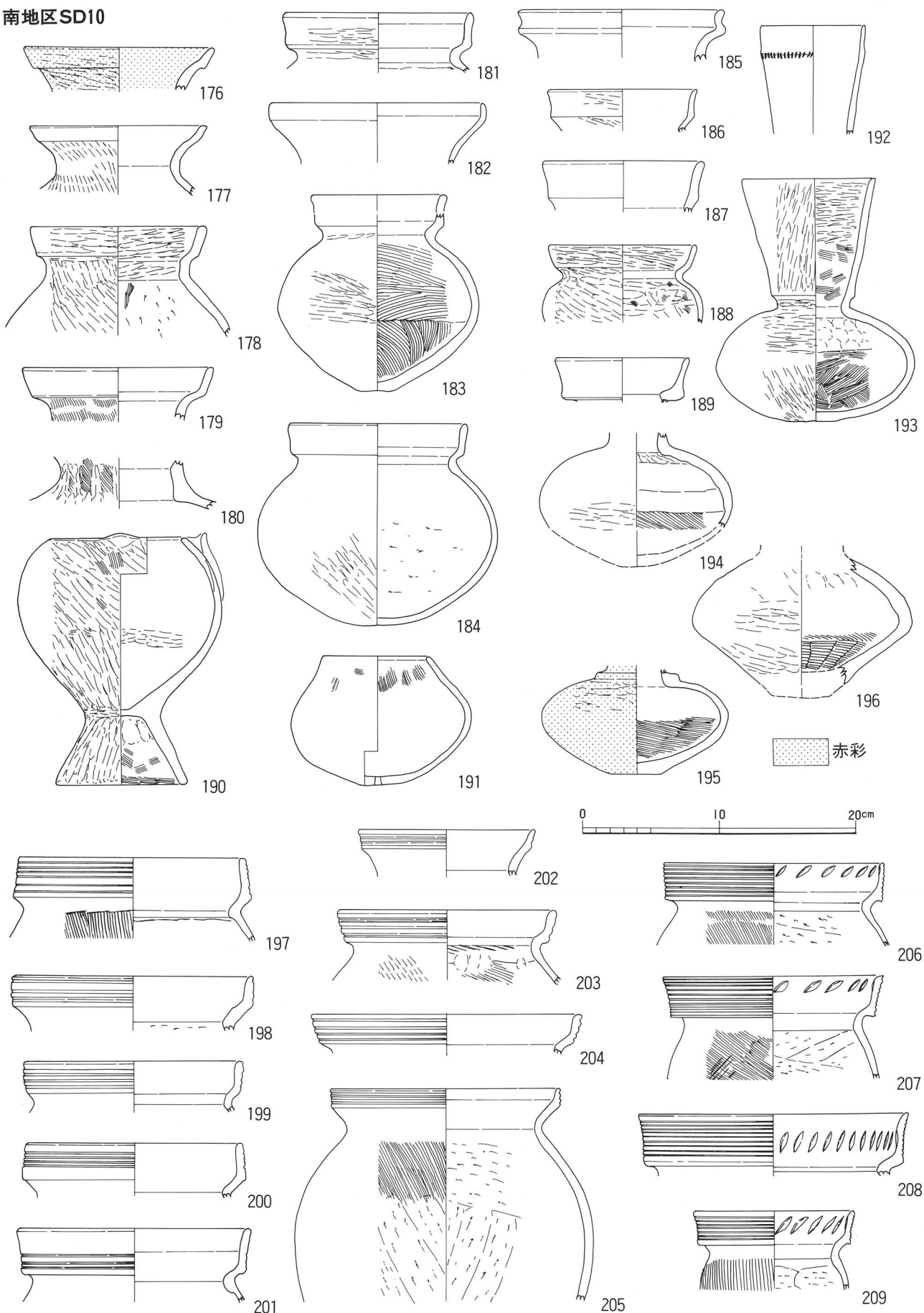
第14图 南地区SD10出土遗物(1/4)

南地区SD10



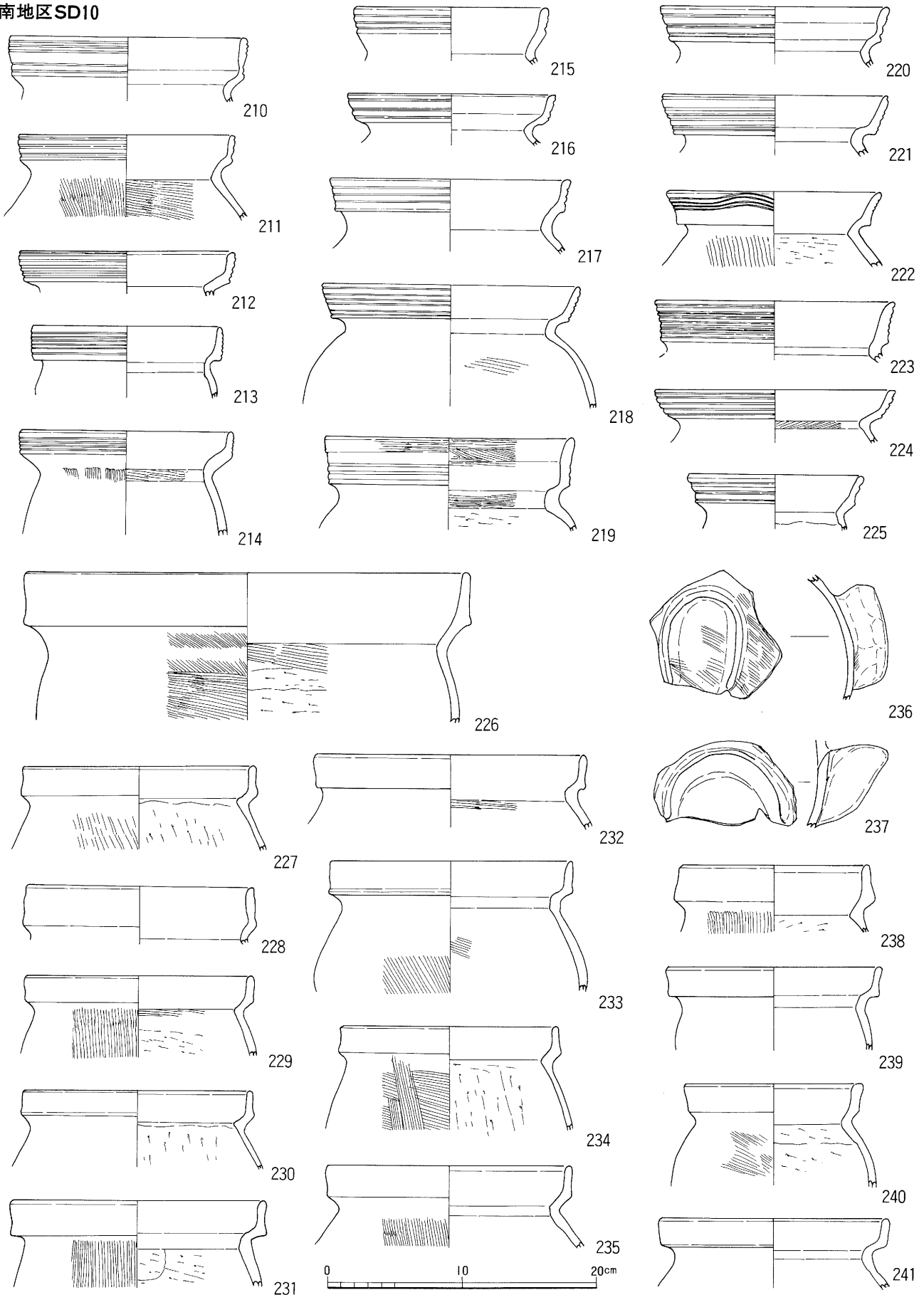
第15图 南地区SD10出土遗物(1/4)

南地区SD10



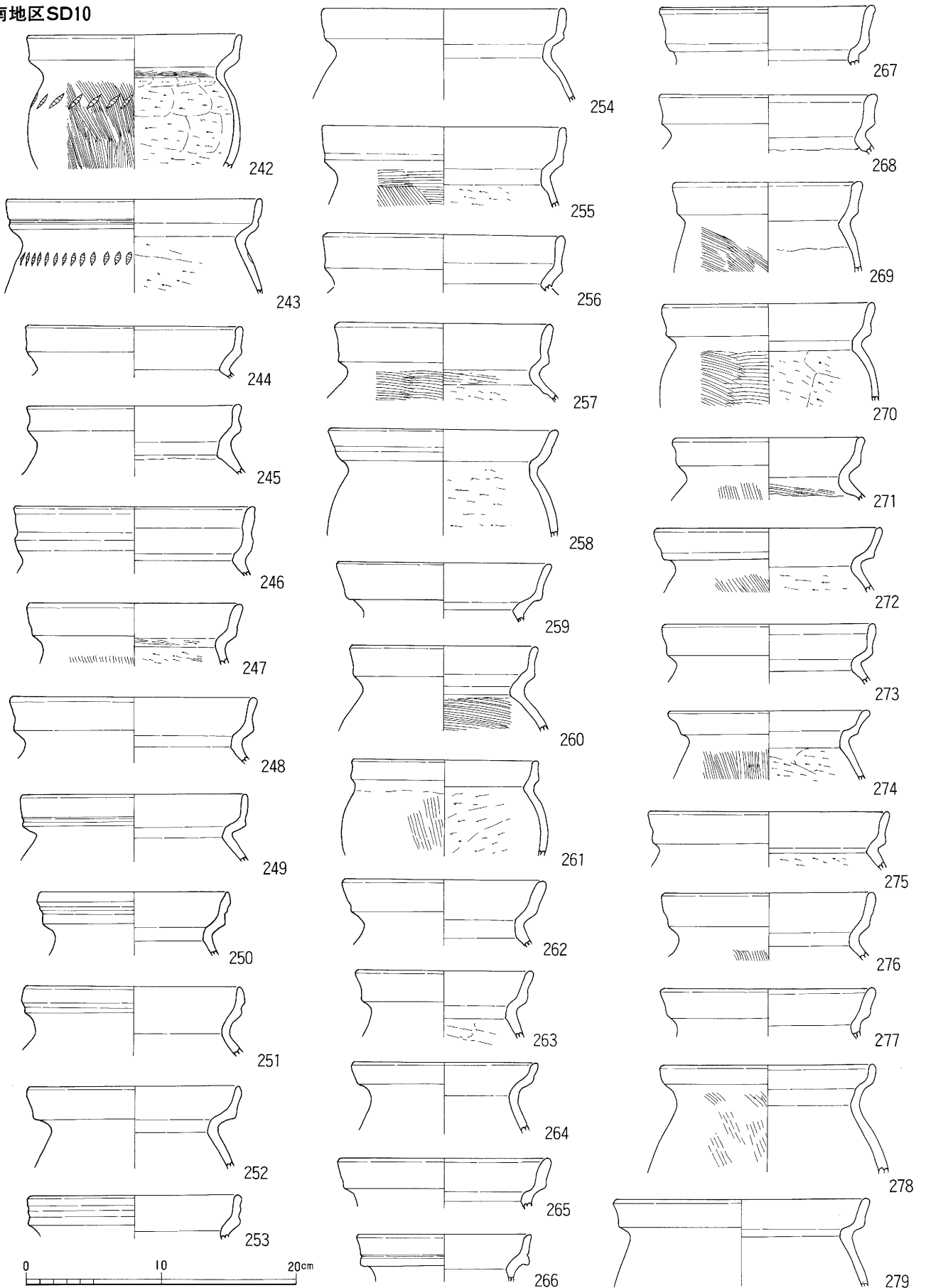
第16图 南地区SD10出土遗物(1/4)

南地区SD10



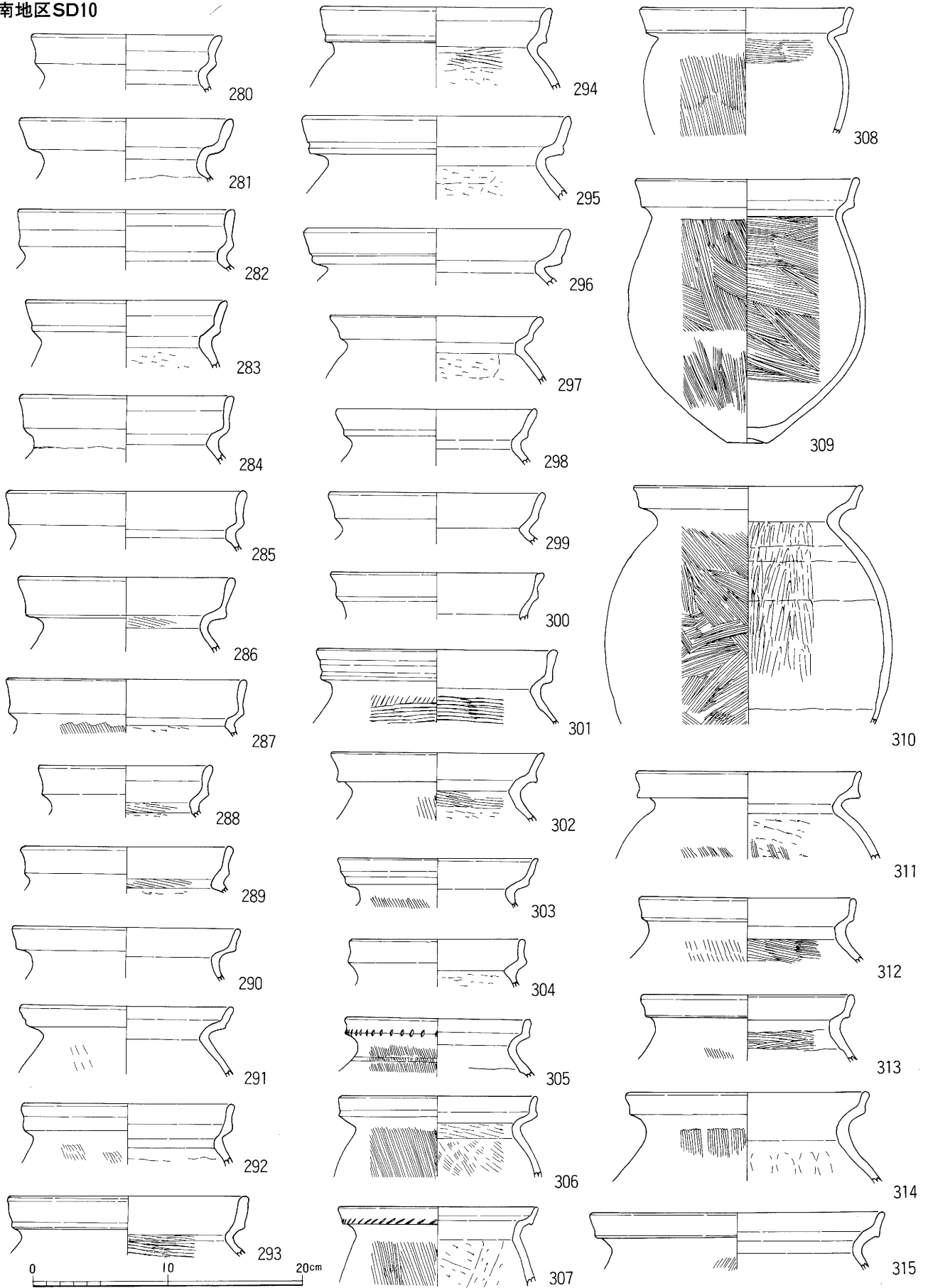
第17图 南地区SD10出土遗物(1/4)

南地区SD10



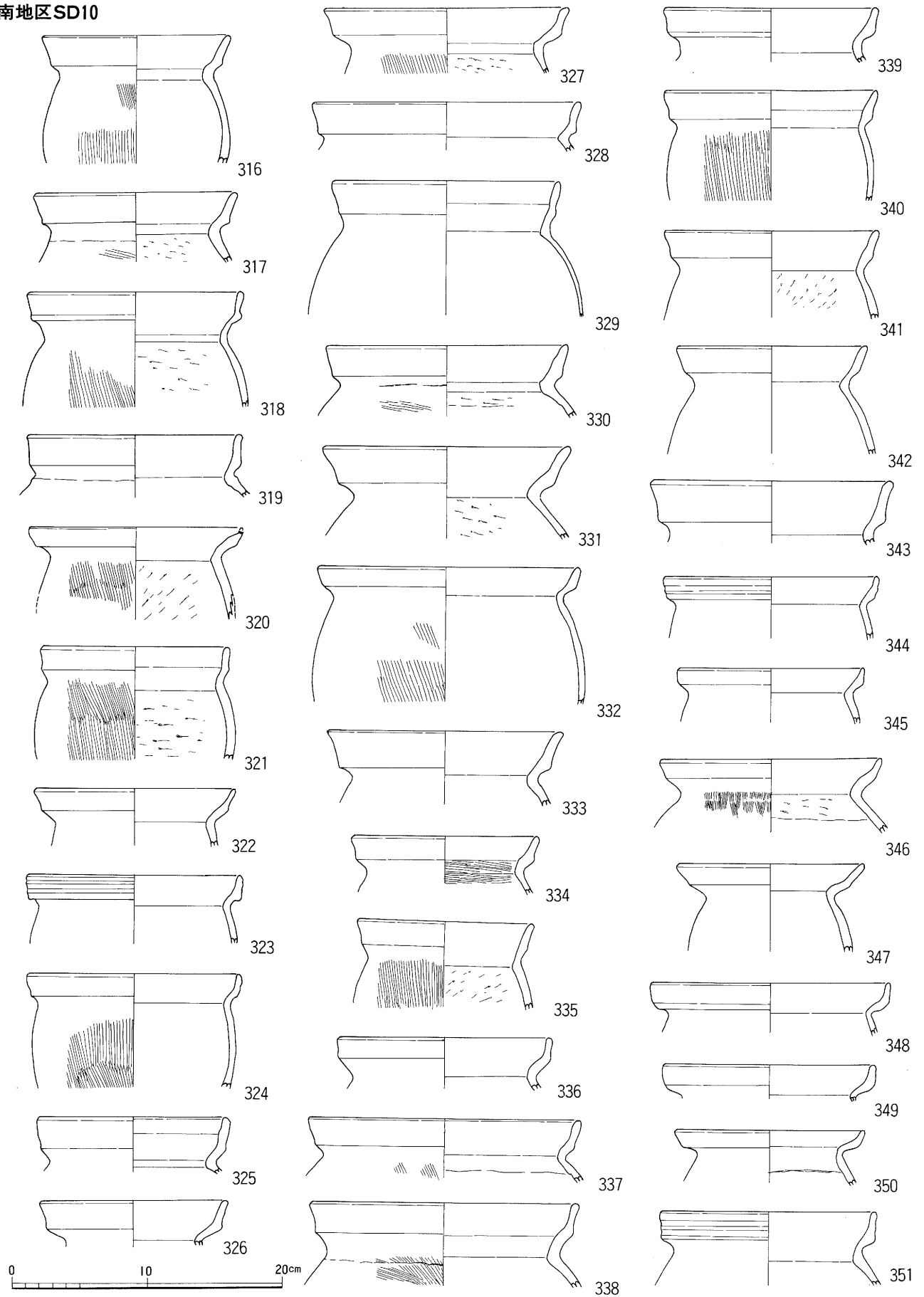
第18图 南地区SD10出土遗物(1/4)

南地区SD10



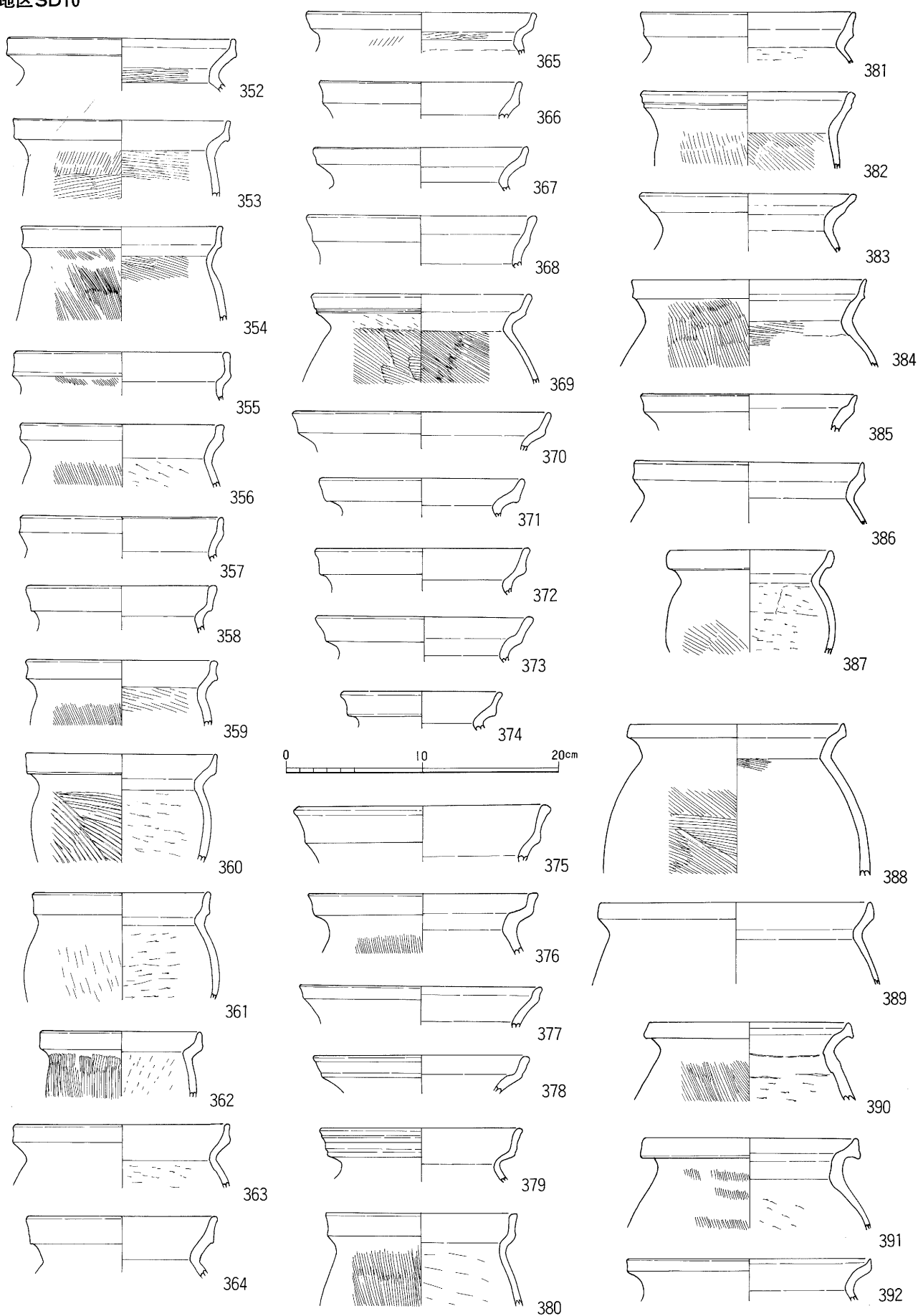
第19图 南地区SD10出土遗物(1/4)

南地区SD10



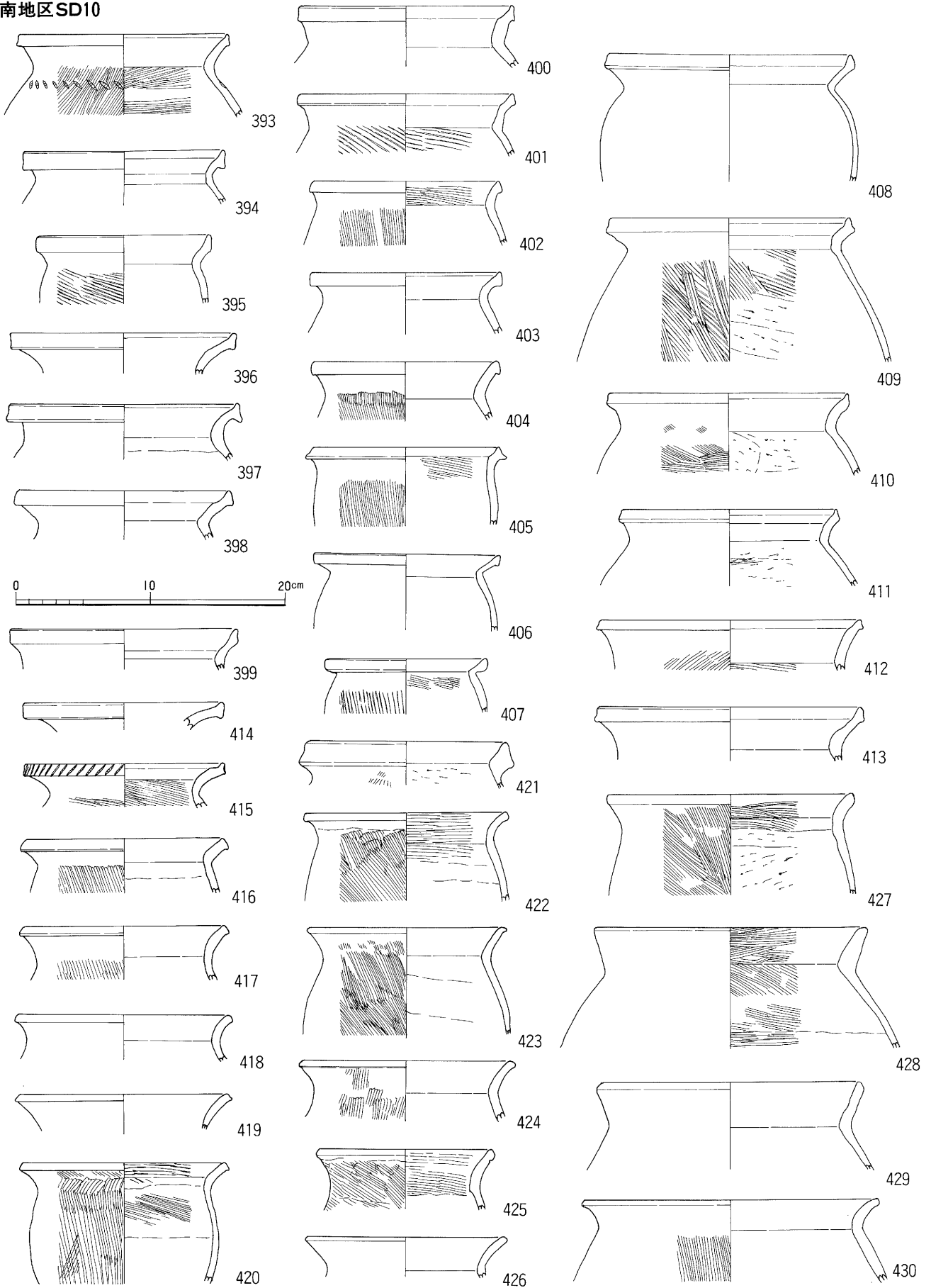
第20图 南地区SD10出土遺物(1/4)

南地区SD10



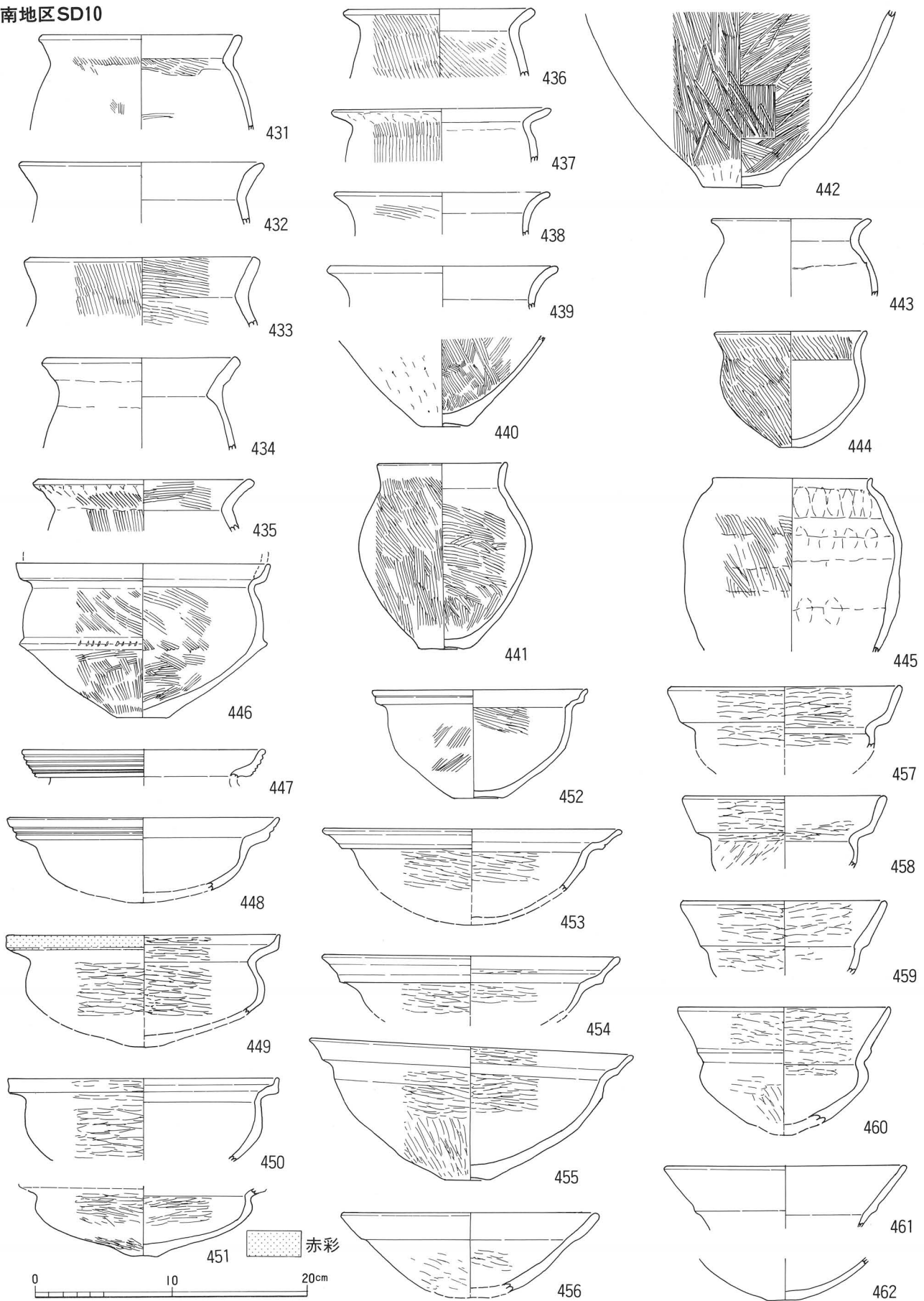
第21图 南地区SD10出土遗物(1/4)

南地区SD10



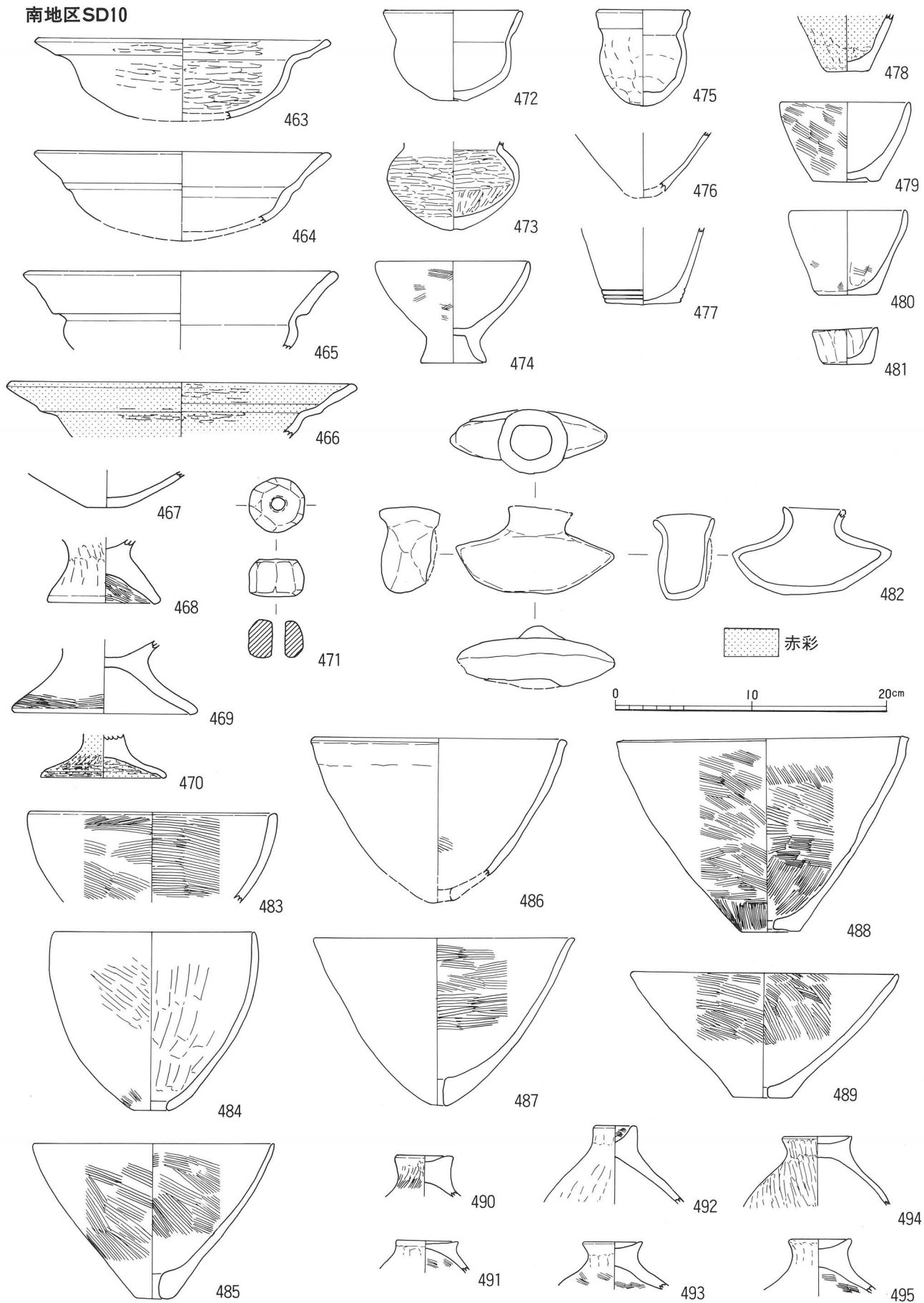
第22图 南地区SD10出土遗物(1/4)

南地区SD10



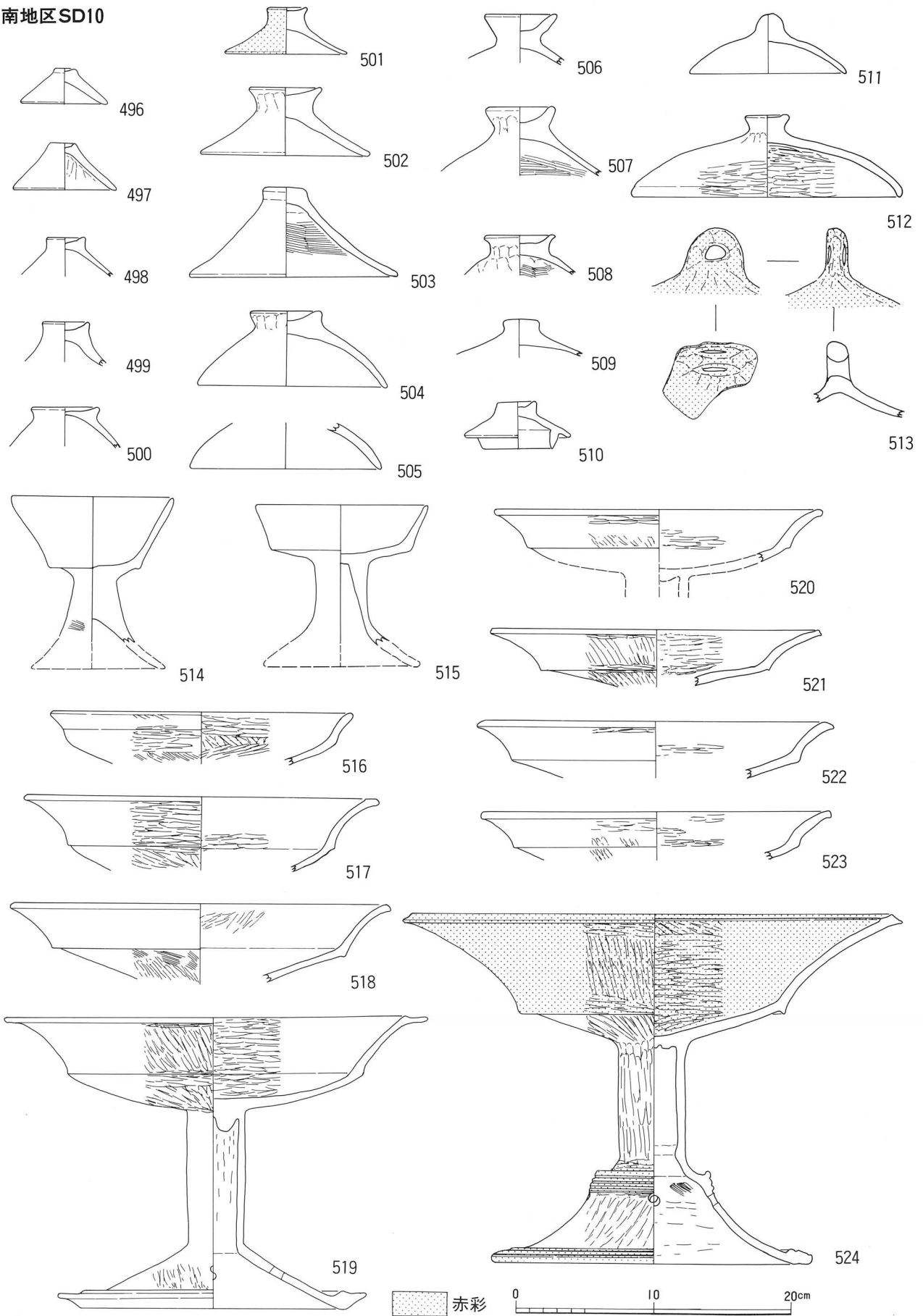
第23图 南地区SD10出土遗物(1/4)

南地区SD10



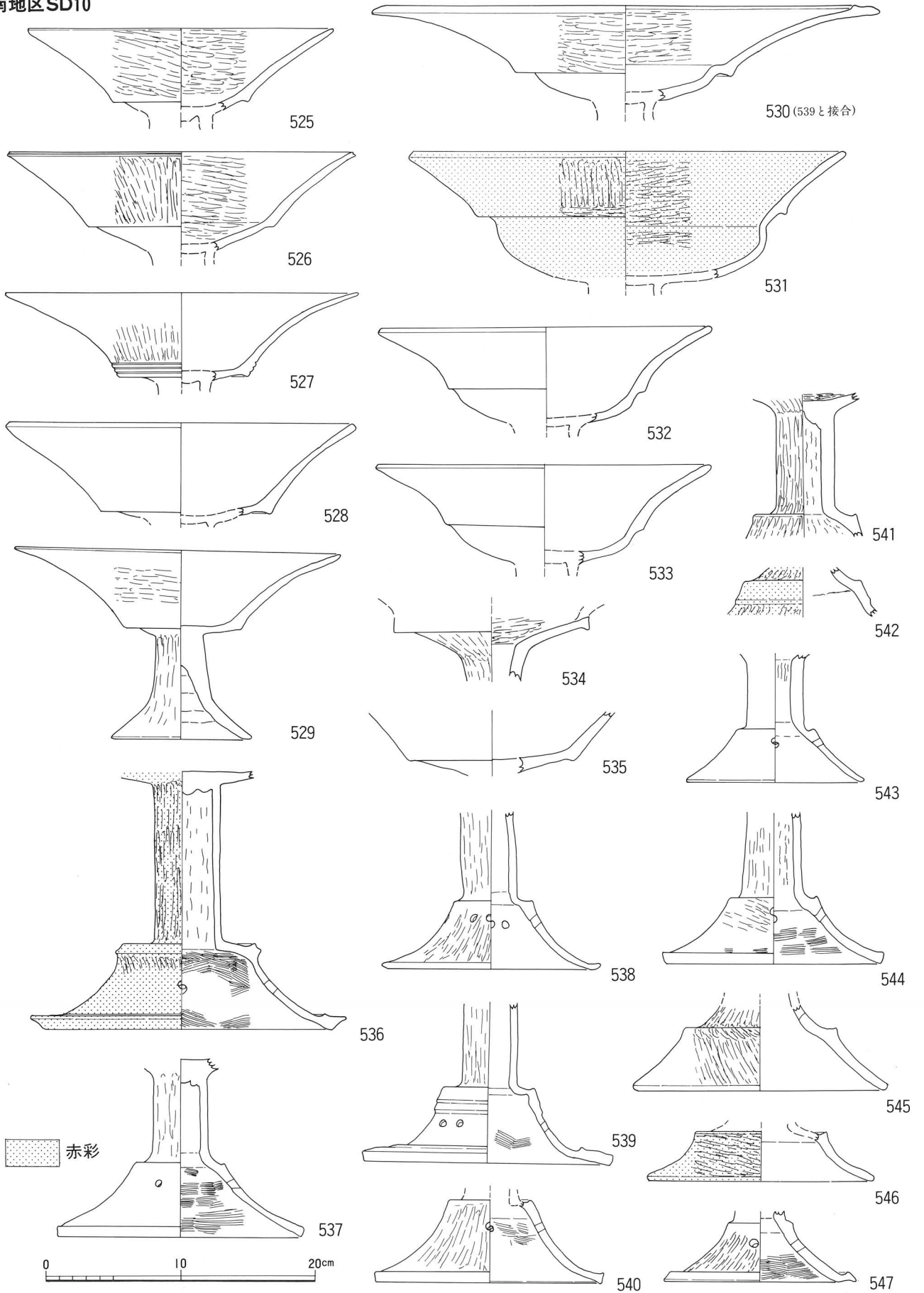
第24图 南地区SD10出土遗物(1/4)

南地区SD10



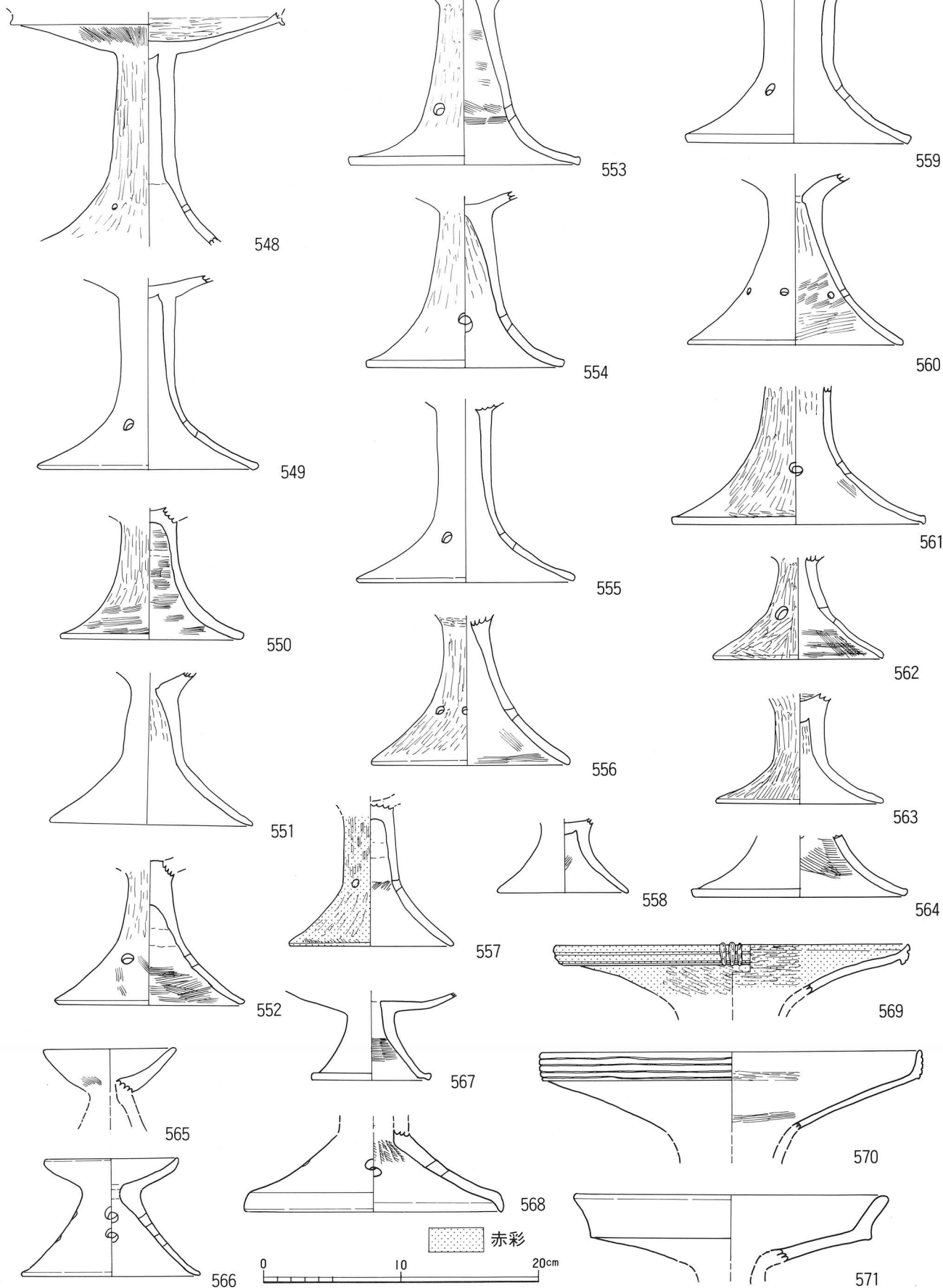
第25图 南地区SD10出土器物(1/4)

南地区SD10



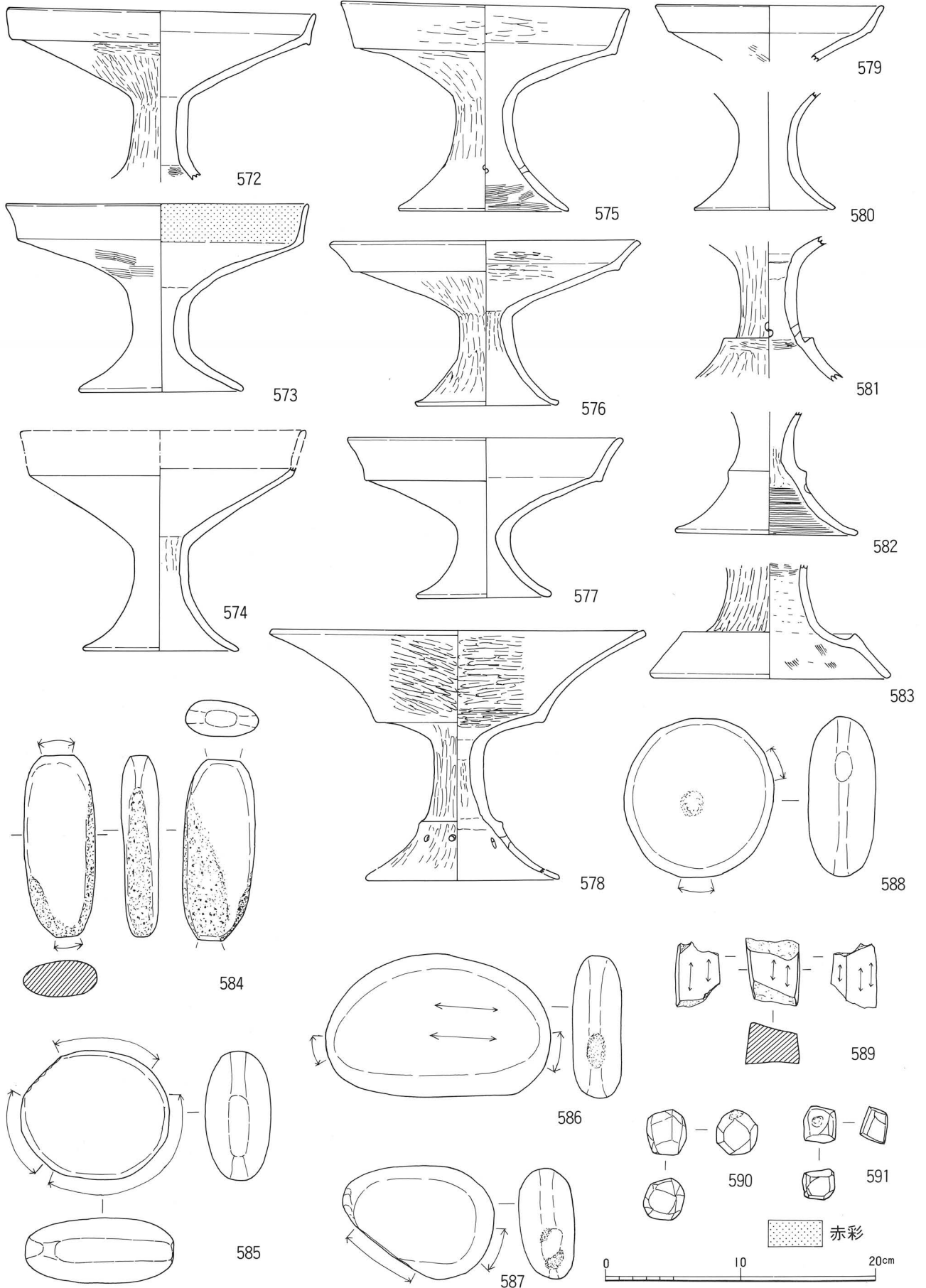
第26图 南地区SD10出土遺物(1/4)

南地区SD10



第27图 南地区SD10出土遺物(1/4)

南地区SD10



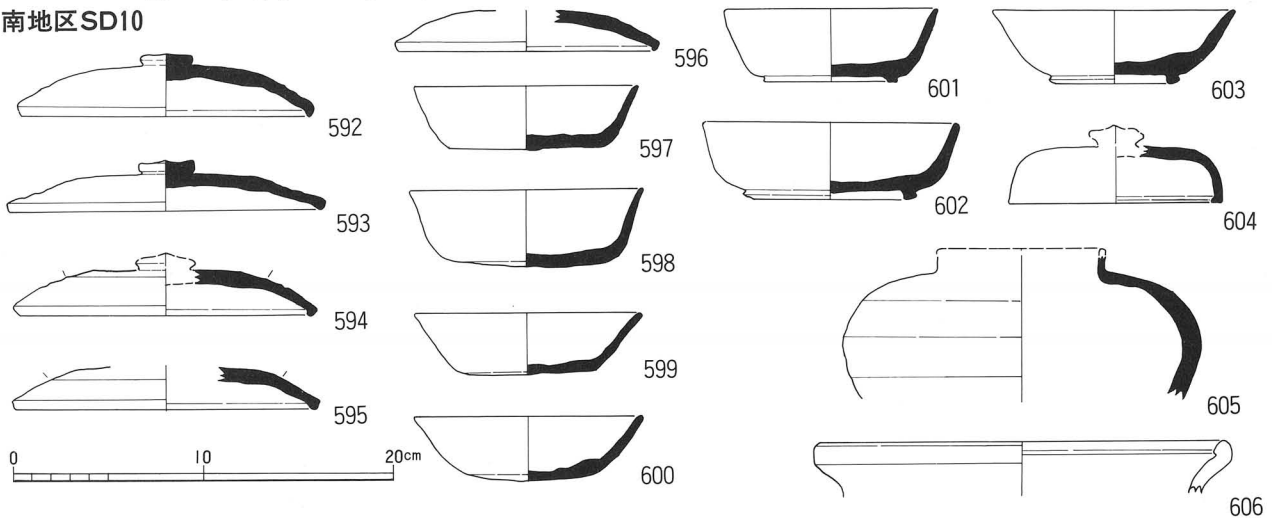
第28图 南地区SD10出土遗物(1/4)

付ける。192～196は細い口頸部をつけた長頸壺Gにあたり、体部下半の内面にはハケ目が残り、上半に輪積み痕や指頭痕、しぼり目などが残り土器の成形法がうかがえる。192には口縁部よりの低い有段部に沿ってヘラ刻みを加える。

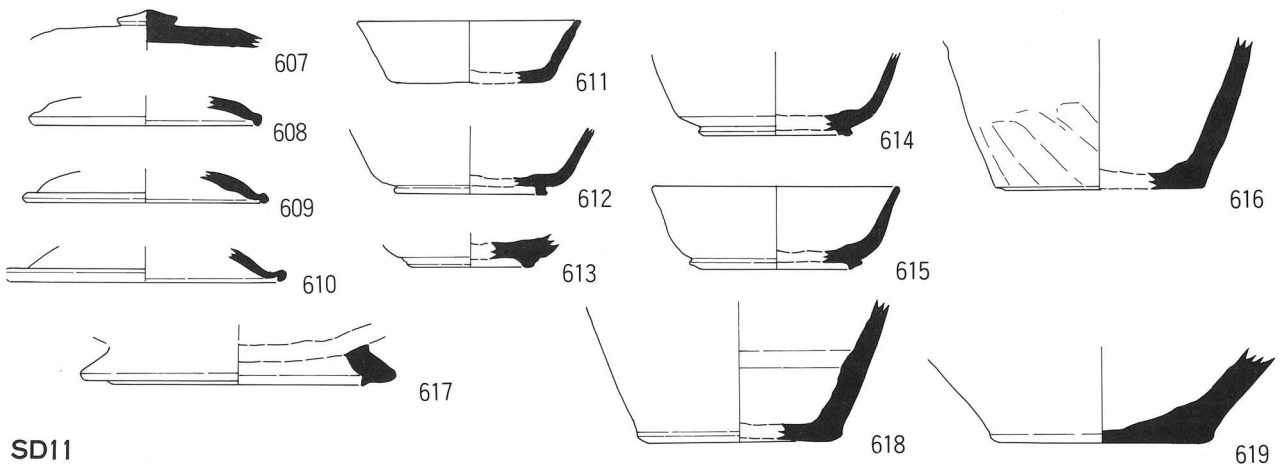
甕（第16図197～第23図445） 有段口縁に擬凹線を施した甕Aの197～225には、口縁部が直立または内傾する197～200やわずかに外傾するものがある。206～209は口縁部内面に指頭痕が浅く連続的に残るものであり、口縁端部は細く先細りする。他のものは概ね口縁端部を丸く収めたものが多くみられる。

有段口縁にヨコナデ調整を加えた無文の甕Bの226～235、238～386には、いくつかの形態差がみられる。227～235・238、244～249、254～257などは口縁部が少し内傾するかまたは直立するものである。258・259、261・272～274、295～303は、口縁部の外傾度が他に比べ強いものである。体部の張りだしは309・310の例から、口径より少し大きくなる程度の細長となる。また、242・243は体部上半にヘラによる列点を巡らせ、305・307は狭い口縁部の屈折に沿ってヘラによる刻みをいれる。更に312～315は口縁部の幅が少し狭くなるものであり、316～351は外傾した口縁部内面の端部から頸部にかけての屈曲が弱くなめらかになっている。352～374、376～378などは口縁部の幅が更に狭くなっているもので、376～380は口縁端部が角張っており、381、384～386は口縁部先端側が薄く先細っているものである。

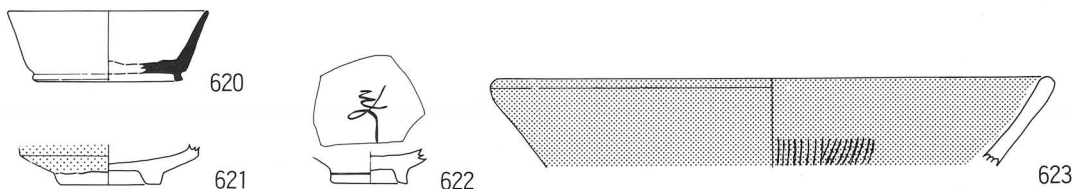
387～413の甕Cは、頸部で「く」の字に屈曲し口縁部端部を肥厚させたいわゆる「能登形甕」と呼ばれる。387～南地区SD10



SD12



SD11



第29図 南地区SD10～12出土遺物(1/4)

388、401～411は口縁端部を上方につまみ上げたものであり、390・392～400は口縁端部を両側に少し肥厚させたものであり、393はヘラ先で刻みを列点状に加えたもの、405は他に比べ体部の張らないもの、415は当類と異なるが口縁端部に斜めにヘラ刻みを施したもので1点のみである。

416～444の甕Dは、外反した「く」の字の口縁部をもつもので、416～420のように口縁端部が角ばるものや427～429のように直線的に伸びた口縁部が少し外傾するものなど変化がみられる。なお、236～237は甕または鉢の体部側面に二個一対で逆「U」の字状をした把手を土器の表面に張りつけたものである。

手焙形土器（第23図446） 土器は、砂粒が多く含まれず淡灰褐色をした口径が18.3cm、器高が11.4cmの大きさを持ち、鉢の体部に断面三角形の突帯を巡らせヘラ刻みを加える。口縁部内側の屈曲面には2箇所^{てあがり}に剥離痕が約10cm隔てて認められることや器形から覆い部は接合していないが手焙形土器である可能性が高い。

鉢（第23図447～467、474～476、477・479・480、483～489） 477・479・480のコップ状をした鉢Aは、口径が9～10cm、器高が6cm前後の小形品であり、477は底面よりに三条のヘラ描き沈線を入れる。474の有台の鉢Bは蓋の形態と似るが、台までの器高が高く鉢とした。483～489の鉢Cは底部が有孔となるもので、底部が砲弾形の487や、平底の488・489と、その中間的な小さな底をもつ484・485があり、いずれも器面には煤状炭化物の付着がない。

有段口縁に擬凹線を施した鉢Dには、447・448があり、有段口縁で無文の鉢Eと形態は共通する。鉢Eには449～456・461、463～466は器高の低いもので、有段口縁が449・450・452のように幅が狭く直すぐ立ち上がるものと、453～455のように有段口縁の幅が狭く外反するもの、456のように屈曲の弱いもの、464～466のように口縁部の長めのものなど形態差がある。また、457～460の鉢Fは、有段口縁の幅がかなりあり器高の高くなっているものである。

皮袋形土器（第24図482） 土器は体部の長さが11.8cm、体部の幅が6.5cmの大きさをもつ。体部は粘土板を底面で接合してバナナ形に成形し両端を尖らせる。体部は片側にある黒斑近くの一部欠き、また口縁部も少し欠いているほかはほぼ原形を留めている。色調は淡灰黄褐色をなし、焼成は良好である。

小形土器（第24図472～473、475・476・478・481） 小形土器には472・475の甕や、473・478の壺、481の鉢がある。472の甕は口径10.0cm、器高6.6cmの大きさで、器面の調整は摩滅により残っていない。475は有段口縁にヨコナデ調整を行い、体部をナデて、下半を軽くヘラケズリした器高が7.0cmの甕であり、調整方法は通常の甕とほぼ一致している。478は内外面に赤彩した壺の体部下半にあたり、481は手づくねによる口径5cm、器高2.6cmの土器である。

この他、468～470は台付きの鉢や壺の脚部にあたり、470は低く内外面にヘラケズリし、赤彩していることから高杯の杯部かもしれない。471は直径4.1cmで重さ約53gの土錘である。側面は細かく面とりし中央に1孔を貫通させている。

蓋（第24図490～第25図513） 510の蓋Aは長頸壺の蓋と推定されるもので、笠形をした蓋の内面にかえりが付くものである。496・497・503の蓋Bは、つまみの径が小さく口縁部が外方に張りだすもので、大小二つの大きさがある。501・502・506・507の蓋Cはつまみの上部がくぼみ、つまみが内湾ぎみに立ち上がるもので、501は外面を赤彩したものである。500・504・505・508の蓋Dは大きなつまみを持ち、浅い椀形から口縁部が外湾して張りだすものである。511・512の蓋Eは小さなつまみを持ち、低く内湾しながら口縁部にいたるものであり、513の蓋Fは環状の小さなつまみを付け赤彩したもので、全形はうかがえない。

高杯（第25図514～第27図564） 514・515は小型の高杯で、杯部の口径は12.0～12.6cmと小さく、杯部は鉢Aのようにコップ状の形態をする。柱状部には中実で脚裾が大きく開く514と、柱状部が円筒状となった515がある。高杯Bの516～524は、短く外反して伸びる杯の口縁部に脚部がつくもので、524のように長い筒状の柱状部に有段の大きく開く脚端部は、折り返して肥厚させる。杯部の口縁部と棒状部までの長さの比率は、 $1/2 \sim 1/2.5$ であり、524では逆に外反する口縁部の方が長く体部の方が短くなっている。また口縁端部は519、524は外方に幅広く張りださせてお

り、有段脚部には二～三条の擬凹線文が引かれ、524は脚部の有文部と杯部を赤彩している。

525～529・535の高杯Cの杯部は、外反して大きく伸びる口縁部に小さな体部がつく形態で、脚部は低くて小さく開くものである。530～533の高杯Dは長く伸びる口縁部が屈曲して体部にいたるものであり、530は口縁部の長さが極めて長いもので、531は口縁部と体部の長さが似たような比率のものである。

高杯の脚部には、大別して536～547の棒状部に有段の脚部の付いたものと、548～564のように脚部がラッパ状に開くものがあり、538・539には二個一対の小孔をあけている。

器台（第27図565～第28図583） 569の器台Aは、大きく開く受け部の口縁端部に2条の沈線を引き、縦に棒状浮文を三条貼りつける。570の器台Bは、受け部の口縁部が真っすぐ立ち上がり屈曲するもので、口縁部に四条の沈線を入れる。565・566の器台Cは、小さな皿状の受け部がつく小形の器台である。572～579は受け部の口縁部が短く立ち上がるもので、578の器台Eは、高杯Cのように大きく外反する受け部に棒状の有段の脚部がつくものである。脚部には2個一対の小孔が3箇所にみられる。同様の形態をした581・582は、器台脚部も有段となり、器台Eの脚部であろうか。また、583の器台Fは、受け部と脚部が相似形となるつつみ形の器台脚部の可能性がある。

石器（第28図584～591） 584は細長い礫の側面と両端に敲打痕をもつ叩き石、585～588は扁平で楕円形や円形をした礫の周囲及び側面に敲打痕があり、586の平坦面と587の図の左下に擦った面がみられる。589はきめの細かい粘板岩の四面を利用した砥石であり、590・591は多面体に擦って加工された軽石製品である。

奈良時代以降の遺物（第29図592～606）

592～606はS D10の覆土上層から出土した遺物で、592～605は須恵器である。592～596の杯蓋は口径13.8～16.8cmで、口縁端部は592・593が丸みをもって下方に尖らせ、他は口縁端部がおれ内面に弱い稜線がはいる。597～600の杯Aは口径12cm程で、底面にヘラ切り痕が残り、597・598は8世紀後半頃、599・600は口縁部の外傾度が強く、9世紀代になる。601～603の高台付きの杯Bで、603は9世紀代である。605は体部をヘラケズリした短頸壺であり、606は土師器の甕であり、口縁端部を内面に巻き込んでおり9世紀代に含まれる。

S D11（第29図620～623）

620は8世紀代の杯Bであり、621は近世の灰褐色の釉をかけた皿で、622は近代の乳灰色の釉に淡青色の文様を入れた碗の底部にあたる。623は茶褐色の釉をかけた近代の摺り鉢である。

S D12（第29図607～619）

いずれも須恵器で、607～610の杯蓋は口縁端部が屈曲しており、612～615の杯身Bは底部からの立ち上がりが緩く高台も低い。617は壺類の底部高台にあたり、616・618は瓶類の底部であり、616の底部よりはヘラケズリされる。これらの須恵器の所属年代は9世紀代に含まれよう。なお、619は中世の珠洲片口の底部であり、内面におろし目が櫛状具により引かれている。

V ま と め

平成3年度に実施された北・南地区の本調査及び試掘調査により確認された遺跡の広がり、調査対象地のほぼ全般におよび、旧下条川の河道の北側に形成された標高約5mの微高地上に位置していた。今回の調査で明らかになったことを以下、列記してまとめとしたい。

1 縄文時代

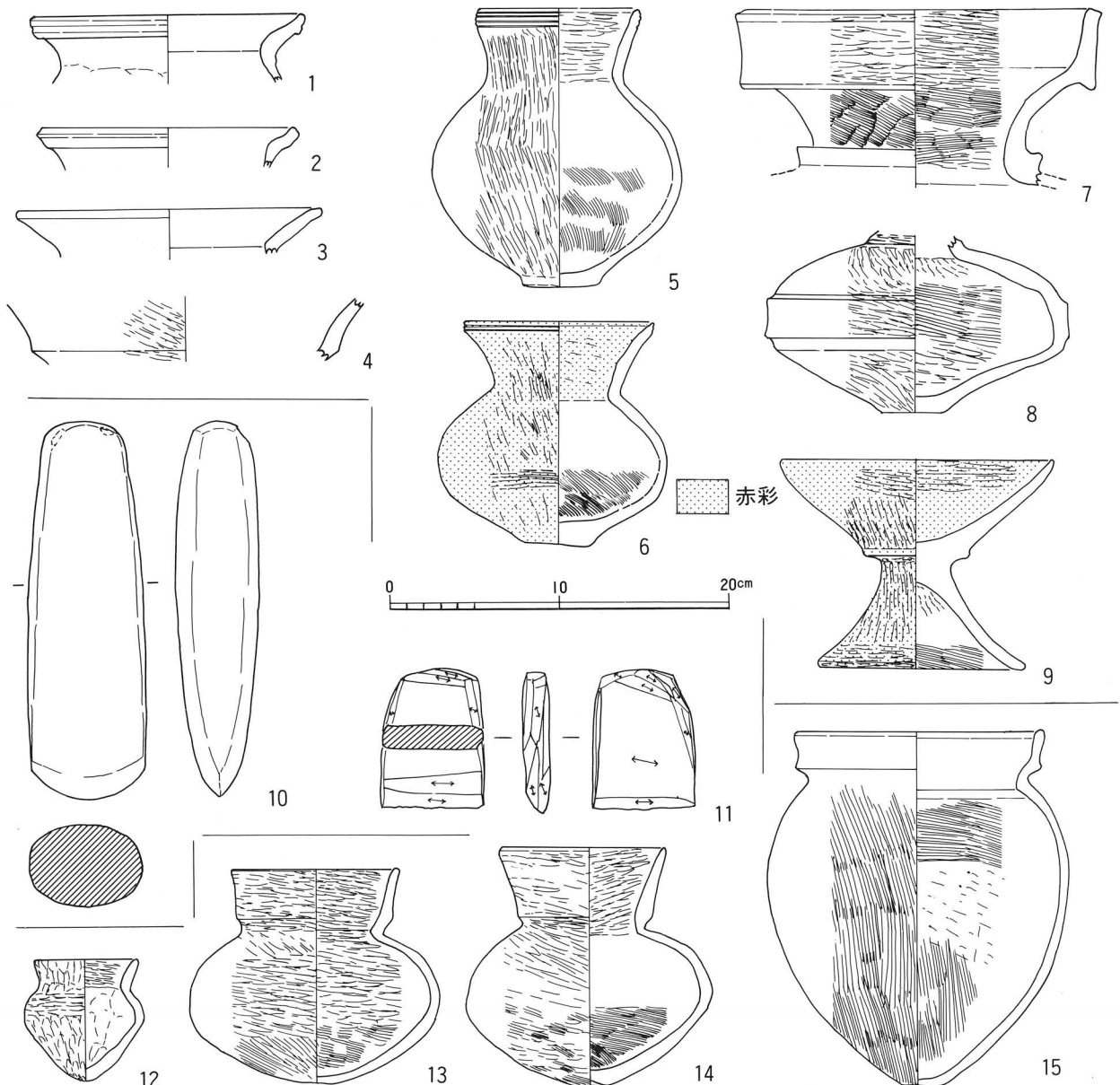
縄文時代の遺物は、昭和34年刊行の『小杉町史』に縄文時代の石棒・磨製石斧・石錘などが紹介されている。今回の調査では、南地区のS D10の溝下層から中期中葉の半截竹管による渦巻き文が1点出土し、南地区の西方約50m隔

てたところから中期前葉から中葉にかけての縄文土器が多く出土している。周辺の中期の遺跡は、射水丘陵上に立地する小杉流通業務団地No.3・7遺跡から2～3棟の住居跡が調査されている程度で、集落跡は少なく遺物が散布する程度の小遺跡が多く、当遺跡から石棒が出ていることから集落の可能性も含まれ、沖積平野での立地が注目される。

2 弥生時代後期から古墳時代初期

この時期の遺構は、南地区SD10の大溝（上幅4.5～7.0m、深さ1.1～1.3m）が1条のみである。溝の覆土からは弥生時代後期の法仏期から月影期にかけての多くの遺物が出土している。しかし 溝の一部を調査したにすぎないため、溝全体の形や方向などは把握できないが、その機能はあきらかではない。なお、本調査区西側での試掘調査では弥生時代後期から古墳時代初期にかけての遺物が12トレンチの一角及び周辺からも検出されており（第2図）、かなり広範囲に遺構・遺物の分布がみられる。

南地区SD10から出土した弥生時代後期後半の遺物は、ある一定期間にわたって溝に廃棄されたもので、出土状態から層序による区分や地点毎の時期差は把握できなかった。時期差により形態の変化がよく表れるものには、高杯があり、杯部の口縁部が短く外反する516～523の高杯Bが法仏Ⅱ式にあたり、口縁部が長くなり外反する524と525～533の高杯C・Dが後続する月影Ⅰ・Ⅱ式に対応する。法仏Ⅱ式に該当するものは、器台A・B・Fや卵形の体部の長



第30図 日の宮(1～4)・二の井(5～9)・伊勢領(10・11)・針原東遺跡(12～15)出土遺物(11は½大)

1～4 山内賢一氏採集, 12～15SE01出土

頸壺のD・Eが含まれ、月影Ⅰ・Ⅱ式には器台C・D・Eや球形の体部にちかくなる壺C₁・C₃及び有段口縁の壺Bの多くも含み、他に蓋A、皮袋形土器、手培土器もこの時期のものであろう。

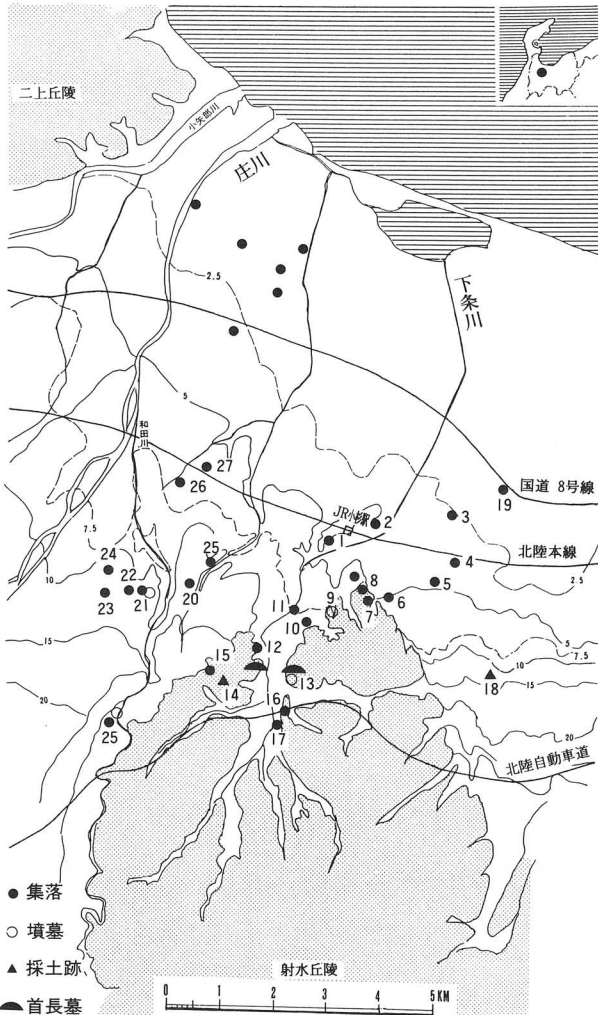
3 奈良・平安時代

この時期の遺構は、北・南地区から検出されたS D01・07・12があって溝が重複するS D01～07では底面の高さが異なることや溝の切り合い関係から時期差が存在している。切り合い関係ではS D01が古く、S D03が新しいことを確認した。これらの溝の多くは南北・東西方向に掘られており、幅0.7～2.0mで深さ数十cm前後の規模をもつ。周辺から柱穴などの建物に伴う遺構はなく、溝の役割・性格は今後の調査で関連が明らかにされよう。

4 下条川流域の弥生時代から古墳時代初期の遺跡分布 (第1・31図)

射水丘陵の西側に位置する庄川水系では、標高10m前後の湧水付近に弥生時代中期以降になってから集落の定着がみられ、後期後半には更に遺跡数が増加する。その中の一つに当たる大門町布目沢北遺跡は、平成元年～3年にかけて発掘調査を行い弥生時代中期の土器と後期後半の方形周溝墓十数基が検出されており、周辺の集落に伴う墓域とみられる [上野他 1990-押川1992]。

下条川水系では中期の遺物は、粘土採土跡と推定される小杉丸山遺跡 [上野他1984] で出土しているが現段階では後期にいたってから集落の定着が確認されている。谷奥の上野遺跡 [橋本1971・1972] では、後期後半から古墳時代初頭にかけて3時期の住居跡が南北約300m にわたって連なる丘陵上から検出されている。中でも第三台地第2号住居跡は直径約12mの大型住居跡であり、小型紡製鏡の出土や管玉未製品多数が出土し大型堅穴が製玉作業場として利用されており、集団の頂点にたつ司祭者層の住居跡であろうとみられている。上野遺跡と干田遺跡の北方約200m隔



No.	遺跡名	弥生/古墳				性格	遺構
		中期	法仏	月影	古府ケルビ		
1	伊勢領遺跡		○	○		集落	大溝
2	高寺遺跡			○		包含地	
3	戸破若宮遺跡		○	○		集落	溝・土壇・井戸
4	針原東遺跡			○		集落	溝・土壇・井戸
5	針原西遺跡			○		包含地	
6	三谷遺跡		○			集落	溝・井戸
7	中山南遺跡			○		集落	住居跡・土壇等
8	中山中遺跡			○		集落	住居跡・土壇等
9	囲山遺跡		○			墳墓	方形周溝墓4・墓壇
10	日の宮遺跡			○		包含地	
11	二の井遺跡			○	○	包含地	
12	小杉流団No.1遺跡			○		墳墓?	方形周溝・墓壇
13	南太閤山I遺跡		○	○		墳墓	方形台状墓
14	小杉丸山遺跡			○		集落?	
15	"	○	○	○		採土跡	採土穴多数
16	上野遺跡			○	○	集落	住居跡・土壇
17	干田遺跡			○		集落?	
18	塚越A遺跡		○			採土跡	採土穴多数
19	白石遺跡			○	○	集落	溝
20	市ノ井遺跡		○			包含地	
21	布目沢北遺跡	○	○	○		墳墓	住居跡・方形周溝墓等
22	堀内遺跡			○		包含地	
23	島鈴田遺跡			○		包含地	
24	島前田遺跡	○				包含地	
25	縄田遺跡			○		包含地	
26	串田新遺跡			○		集落・墓地	住居跡・方形周溝墓等
27	八塚A遺跡			○		包含地	
28	八塚B遺跡			○		包含地	

第31図 下条川流域の弥生～古墳時代初期の遺跡分布

てた小丘陵上にはこれらの墓域とあたると見られる南太閤山Ⅰ遺跡が調査されており、後期前半から末にかけての方形台状墓や甕棺墓が発掘されている。

更に下条川の谷頭の平野部には、日の宮遺跡や二の井遺跡から第30図1～9の壺や甕高杯などが以前に出土しており、丘陵上からは墓域として薬勝寺池南西遺跡から月影期の方形周溝墓1基と、囲山遺跡から後期後半の方形周溝墓4基と木棺墓などが検出されている。囲山遺跡では丘陵頂部に大型区画墓を築き、周辺に小区画墓が配していく構築方法がとられこの方法は、南太閤山遺跡でも同様であり、被葬者は目前に広がる沖積地を生産区域とした大白や二の井遺跡に関連した人々であろう。

平野に接する低い丘陵上に立地する遺跡では、中山中・中山南遺跡が知られ、浅い谷部を狭んだ250～300mの大きさの三つの丘陵上からは月影式期を主体とする住居跡が各々検出されており、丘陵を単位とする集落跡が存在し、相互に関連性を有していたと思われる。また東側裾部の平野部には法仏Ⅱ式期の集落が存在していたようで割り抜き杵を用いた井戸2基と溝などがみついている。

鍛冶川に近い針原東遺跡は平成2・3年に発掘調査し、月影期の割り抜き井戸2基や土坑・溝などが検出され、2号井戸からは第30図の一括土器が出土し、小型土器の伴出から井戸の祭祀が伺える。

下条川流域では、伊勢領遺跡から昭和初年に太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧各1点と高杯が出土している。今回の調査では法仏Ⅱ式から主に月影式にかけての遺物で占められている。また下流約1.1kmからは高寺遺跡の地下約1mから小杉町史で紹介されている月影式の壺が出土している。

射水丘陵から2～3km隔てた遺跡では、戸破若宮遺跡と白石遺跡が発掘されており、昭和60年実施の新幹線の分布調査では東西2～3kmにわたって弥生時代末頃の土器が各所で採集されていて、更に今後の調査により新たな集落が予想される。戸破若宮遺跡からは、法仏Ⅱ式から月影式にかけての溝・井戸・土坑が検出され、白石遺跡では月影式から古府クルビ式にかけての遺物と溝がみついている [上野1992]。

以上のように下条川流域の遺跡分布は、2～3kmの広がりできグループ分けができ農業共同体の各集落とその家族集団の墓域が別々に設けられており、流域の人々の定着が庄川流域の中期より若干開始が遅く弥生時代後期前半から始まり、後半の法仏Ⅱ式から月影期に急激に進展する傾向が見うけられる。この遺跡の急増する時期は県内の動向と一致している。やがて古墳時代には、流域の丘陵上にいくつかの古墳群が分布している。左岸には4世紀におさまる全長約43mの前方後円墳が築かれ、谷を狭んで対峙する右岸には前方後円墳の可能性をもつ変更所西古墳が知られ [西井1992]、この地域を統括した首長墓として把えられている。

引用・参考文献

- 上野章・押川恵子 1990 『布目沢北遺跡発掘調査概要』 大門町教育委員会
押川恵子 1992 「大門町布目沢北遺跡」 埋文とやま第37号 富山県埋蔵文化財センター所報
木倉豊信 1959 「郷土文化の黎明」『小杉町史』 小杉町
久々忠義 1986 「富山県における『月影期』土器について」「シンポジウム『月影式』について」石川考古学研究会
小島俊彰・橋本正 1971 『小杉町上野遺跡調査概要』 富山県教育委員会
西井龍儀 1992 「射水丘陵地域研究報告(1)－6古墳群の踏査から－」 大境第14号 富山考古学会
橋本 正 1972 『小杉町上野遺跡－記録写真編－』 富山県教育委員会

図版 1

北地区

1. 遠景
(北東から)



2. 北地区近景
(北から)



3. 北地区南側
近景(東から)



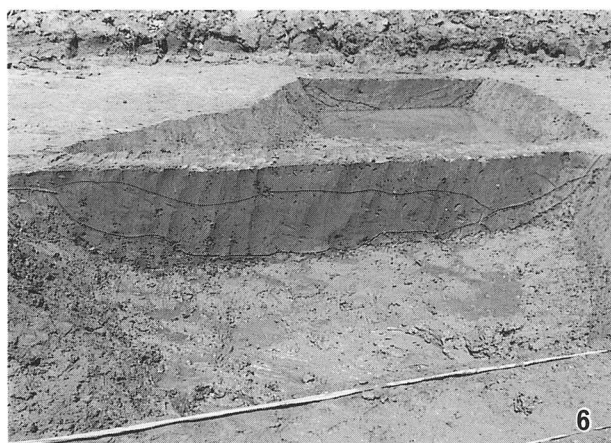
4. SD03の土層
(東から)



5. SD05・06
の土層(東から)



6. SD06の土層
(東から)



7. 8. SD03
土器出土状況



南地区

9. 南地区近景
(北から)



10. SD10
発掘作業



図版 2

南地区



1



2

1.~3.SD10
土器出地状況



3



4

4.SD10
西端の土層



5



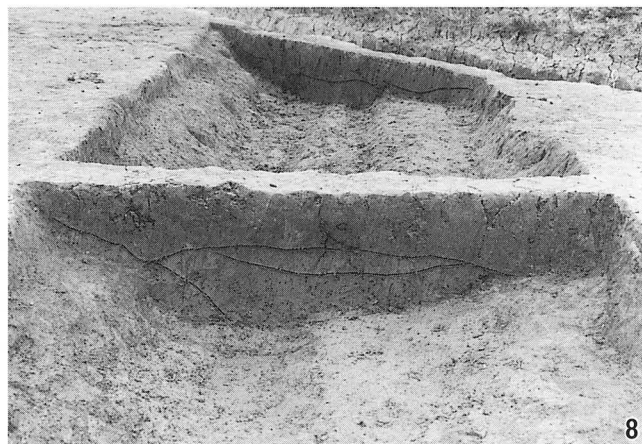
6

5.SD10
東端の土層

6.SD近景
(東から)



7



8

7.SD11の土層

8.SD12の土層



9



10

9.SD12
発掘作業

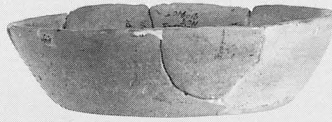
10.同土器の
出土状況

图版 3
出土遗物

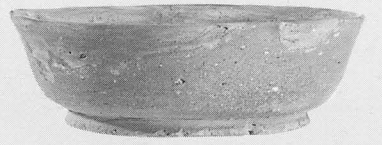
北地区



70



72

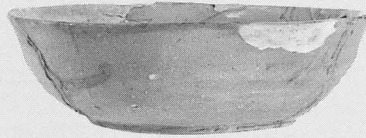


76

SD03
(70.72.76)



88



89

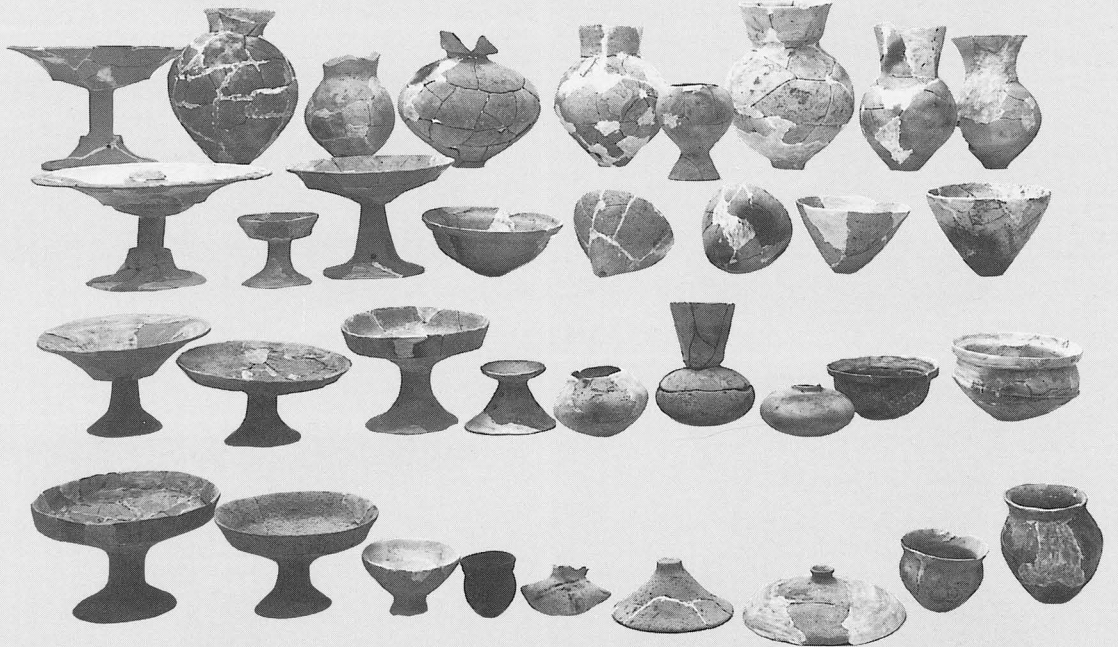


90

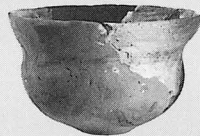
SD05
(88.89.90)

南地区

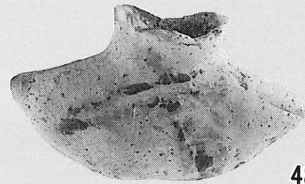
SD10出土



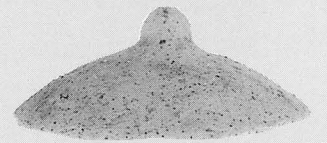
479



472



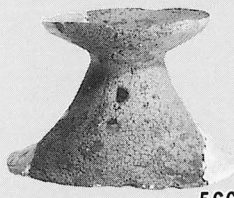
482



511



475



566



474



488



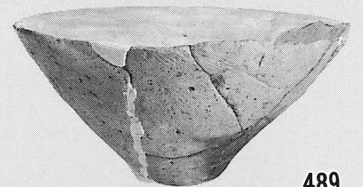
441



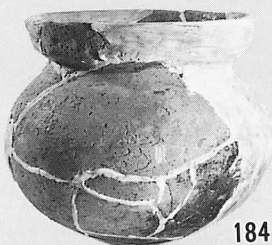
515



452



489



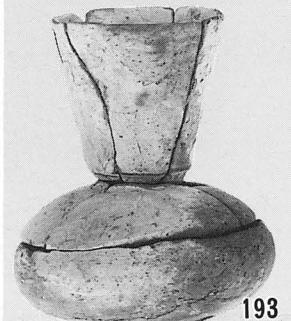
184



577



190



193

图版 4

出土遗物

南地区

SD10出土



524



149



518



446



147



529



519



112



530
539

小杉町伊勢領遺跡発掘調査概要

発行日 1992年3月30日
編集 小杉町教育委員会
発行 富山県射水郡小杉町戸破1511
〒939-03 電話(0766)56-1511
印刷 日興印刷株式会社
